想然著聞奇集

へ 13
1191
4

想山著聞奇集巻の四

目録

一 日光山龍り堂不思議の事
　　奥氷者の事
一 大石の変化と〳〵即冠の崩りする事
一 大八蛇の尾と蔵〳〵崇らまたする事
　　奥漢書をん右崇を祓する事
一 義濃国の〳〵熊を捕る事
一 死り神の付〳〵ハ嘘とも云難き事
一 信州の〳〵云怪獣を射殺する事
一 雁の首り金と魅〳〵逆形する事
　　奥思氏の奥亜蘆の頭りたる事

15
1191
4

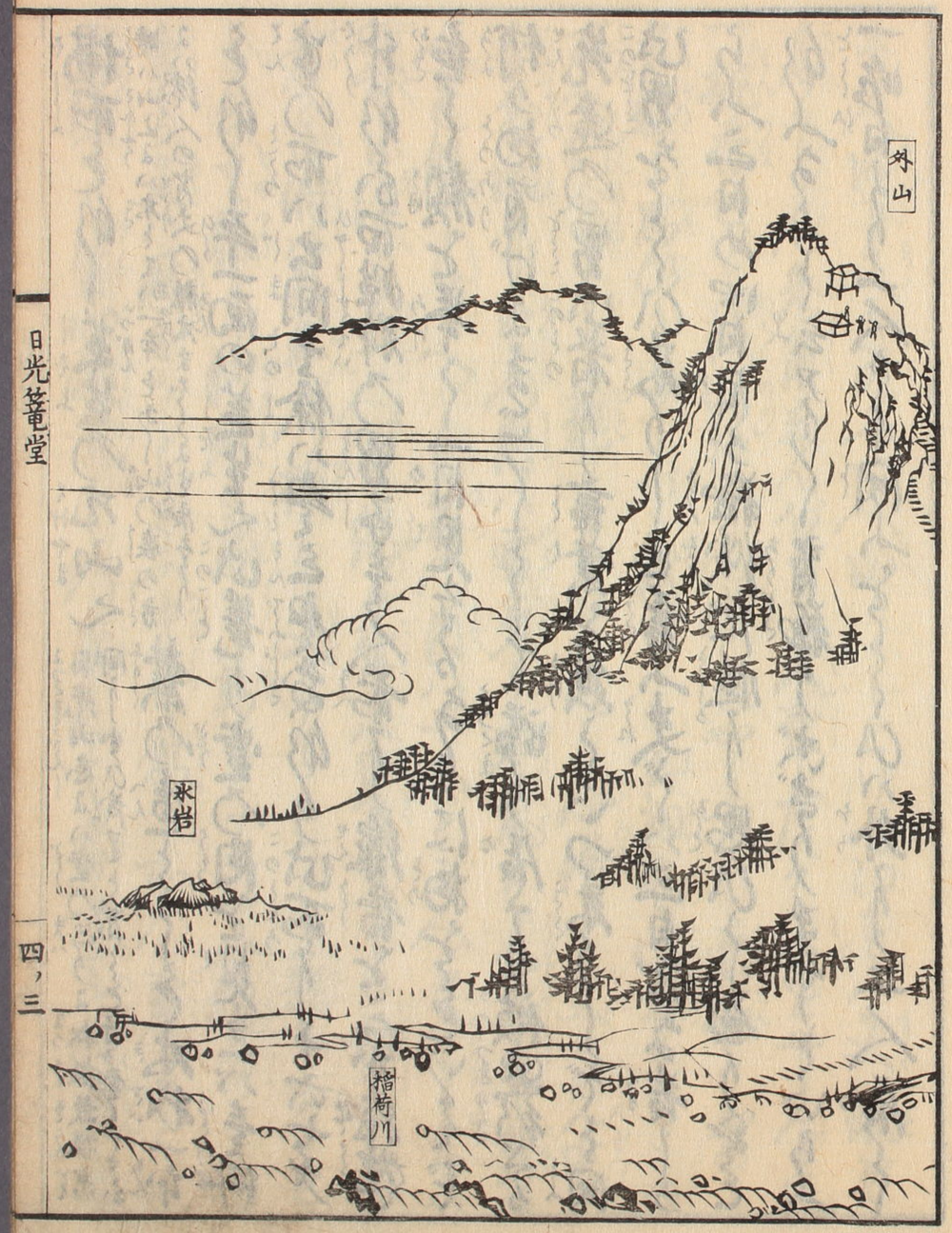
一 耳の天ひ成人の事
一 龍の卵 英雷乃ゐの事
一 古程人り化〳〵来る事
英 地業乃死を知〳〵逝を遂ざる事
一 西夜房弥陀仏来の来迎を拝〳〵往生とのゝ事
一 義濃国須原神社祭事不思議英霊験乃事

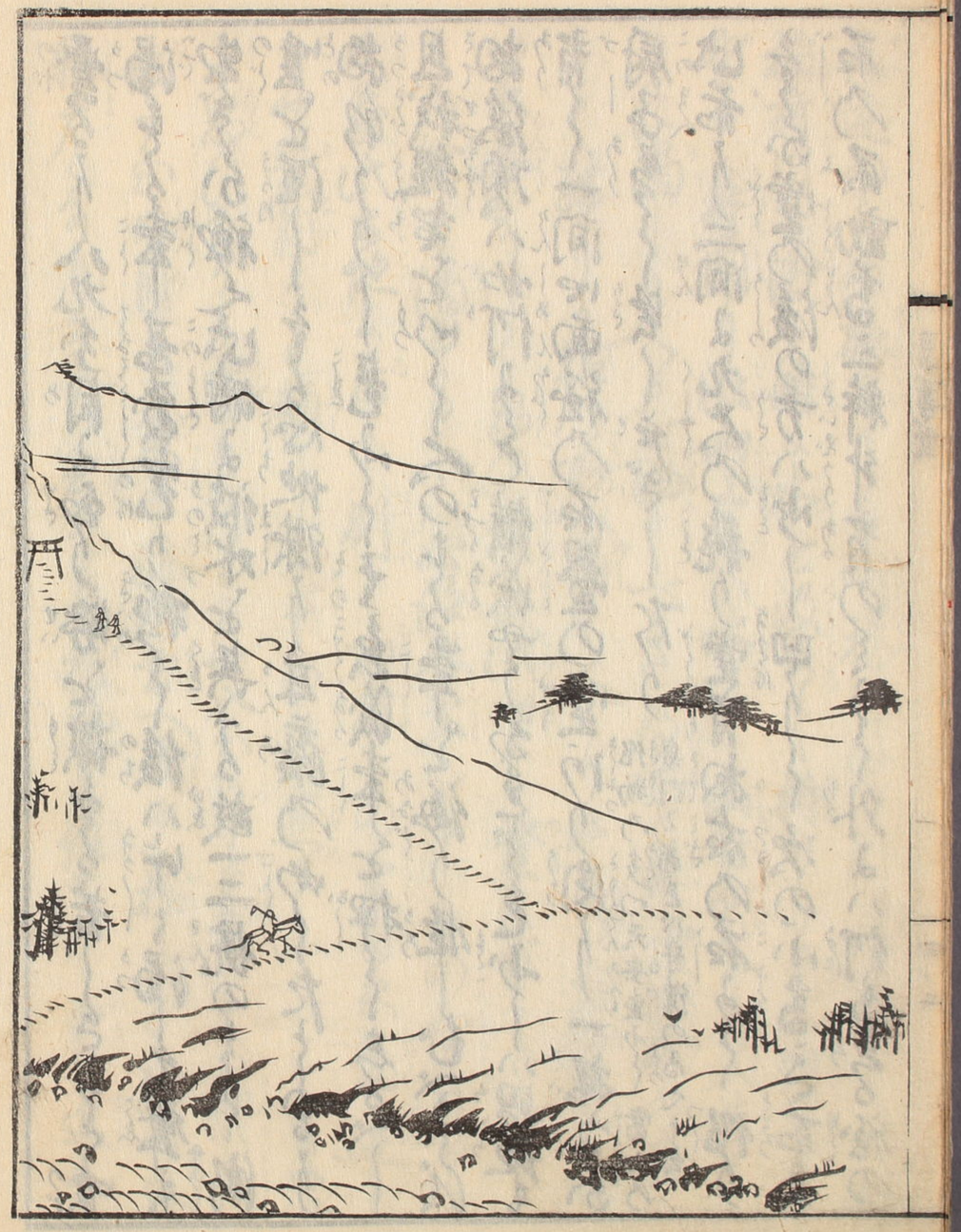
日光山外山龍り堂不思議の事
英 氷岩乃事

野州日光山乃内御山より向ひ〳〵西り右の方ハ稲荷川〳〵と大河流を出其川乃向より外山と云有金〳〵宮の孤山乃〳〵登り十八町有とゝへり流〳〵登る程急なるまゝど〳〵十町ゆ迄そたゞ順〳〵急成坂〳〵迄而り僅二三百の急洞り〳〵多居有流〳〵と顧り見をバ右山より西面まり大谷川乃末清川へ落入〳〵常別乃方を川末の西流廿余里一眺り見渡〳〵後京〳〵初迄而乃三ハ嶽〳〵さゝる絶壁う〳〵岡と対か心地〳〵悪空り絶〳〵巖石より僅ゞ〳〵急と流ゝるゞどの跡るりて巖乃角苔夢乃根よとまり〳〵渺頂より登り滑ゝり

先達のこの旅行をひらく用意して彼の
稲荷川を渡る時は水を汲みて持ち上り色は何ともな
き〳〵尋ね上り山上より水を山と望りの〳〵苦し
さに渇〳〵と助〳〵ばかりなる云予性来の事
なれば人より格別の面へ彩を勇敢猛を性
ゆえ甚おそれ〳〵思ひ僅に山より登るべき苦し
さの餘り渇きるに心迫ぬ事とは云ながら
久敷山地より居〳〵別〳〵切着この事の忍先達を
させ案内をと頼〳〵る事あるべき〳〵こそ貴僧
と思ひうづ〳〵望りたるよ七八分目より動りて八絶壁
居るに力目り怒り流の方へ戦る〳〵樹の外
邪方とより去うづ〳〵元来より任せ〳〵勇〳〵進んで

登るより八九分目より動を樹を掴む苦〳〵さに喉
渇きるに事甚苦しく極〳〵後は中〳〵渇て聲も
出ざるか極〳〵此時より彼水を呉うる故二三椀の〳〵湖
底と渇〳〵する心地漸り其露の如〳〵たるより
拘れ〳〵〳〵色み〳〵まる色彩を押〳〵まるべ
且我輩を〳〵人のもる事を偏り怪むべう〳〵
如後項は如何ともあ〳〵ぶ〳〵は異地も
有〳〵一間は西極の石畳の堂にり間り一抜ある
厨子ある〳〵岩〳〵戸ざ〳〵たり
此前り二間より九尺の籠り堂有如右の石より彫り
ある堂の後の方は少〳〵四り〳〵次の小ぶる石より
石の不動尊三体外より何も彫る極の


男山
来岩
稲荷川



場所を形〳〵芝生の元山之日光山志よハ堂のもとりよ杉根数根岩間より生ひ茂りて背丈と手ゑ登りうふ時ハ山之よハ本てハ一本を分〳〵山の裏の方ハ繁の竜の髭の亀〳〵と本杉一本よハ繁の人の背丈の雑木まぢ〳〵よ生居そうりこのこと

を形〳〵平一面の芝生之山麓り堂の内を見まバ左ハ本堂の西ハ云間玉簾ハ巻之変形り山西りナ六七タ

計形の西姓弁の男子さ〳〵人前り線香と三本程燈

亜〳〵顔を挙〳〵一目見さるうりに拝をもいたゞ

何う拝有げよまご〳〵と〳〵て踊り居り彼連行る

先達の男山者り言葉を無〳〵いつ来り〳〵ぞと問

山男を〳〵ひ来り〳〵と言ハ夫ぐ〳〵ハ三日だな若〳〵

らハ三日めの日目ゞ程だ慥り思ひ〳〵面り出と

形〳〵よ〳〵云アイ〳〵背程うださりますといらハ

一時ハ一人〳〵問ハを〳〵ひハ外り二人居〳〵

さ人問り又さのハ一人問りしとい〳〵何をハ又誰ぞ

来〳〵〳〵ん先角さんぞうハ大事だぞ水をゆ〳〵んて

一銭者せ〳〵後山ゆをの水をやるべ〳〵薬椀を取ろう

背程〳〵思ひ〳〵ゆ〳〵づ〳〵裁けよ〳〵云和さ山者こそこの

面へ沙食〳〵〳〵籠をとふのハ〳〵心滑〳〵夫ゞ先達よ

要変問り色乃内ハ雷多〳〵寒氣を毒変ま〳〵籠る

人を形〳〵ゆ〳〵〳〵と裏の内ハ二人を三人を寄る事ハ

四度り注〳〵を一人を絡る事ハ四度ろ〳〵ハ私るども

着〳〵時ハ毎年の振り又〳〵を〳〵籠りま〳〵

〳〵云を振り行故よ度こ〳〵籠り〳〵ふや心頼有〳〵の

事の又ハ慥こう〳〵をふ中〳〵慥〳〵面の事ハ〳〵

四度の〳〵皆心願者〳〵の事人〳〵を心願を

行事うや格別霊験を有ること同じ
きうぬとり事ハ四度行ひ云ハ願と云ハ願
の事ハ四度の中祈
を祈りとり或ハ私子供の長生習癖の故一向目ゞ
見えませぬ行事を紙ゝ過ゝり讀ゝり結ぶ祈
願ハ又職業をバ人並ゝさせゝ下さるとも
行ふ種ゝの願ひ四度と云事思ハ祈今歌舞
妓家の僧侶ハ行法ゝ一七日を断食して
法を修へ或ハ祈を行ふ
事ハ地ゝ山西へ来ゝ断食する事ハ
一向容易なる有さまなゝ去ることさゝを祈さ
事に凝り居ゝ祈る所ぜひを應ハ有ゝ能さゝ

若ゝ初ゝ爰明ゝ江戸ゝ断食する
ハを祈力ゝ二便ゝ断事さへ表雑穢ゝ吹ゝるハ
山堂ハ籠ゝ所ゝ下ゝ元事者ハ毎朝疫の時の間ハ
稲荷門ゝ下ゝ疫の明るゝ人ゝ出ゝ川中
ゝ水ゝ浴ゝ垢離ゝ丸形芸ゝ事ゝ我の
信心事柱のこハ別ゝ能き所ハ右先達ハ
どゝい川ゝ水ゝ浴びあび其都ゝ
ゝ此ゝ事ハ事ハ有ゝ道理ゝ思
ゝふ物ゝ裏ハ思議ゝ事の有ゝ願の
成就ゝ願ゝ者ハ心ゝ一七日の籠ゝ出来業下山
ゝる事ゝ先達の云所人ハ成ゝ遂ゝる事ゝ
ゝ僅一日二日居ゝ断食の懸変ゝ止ゝ

祇の着ハ淫り慾〻労事うまとばかりとうき事
ほゞ〻根性を慢〻〻去うを信心堅固よ〻〻竜り
さゝ着ゝを障碍とうきを〻〻満願成り業下山
きらゝのも澤山よ口度ゆ〻〻支ハ〻〻恐変事う
情度ゆ〻〻云成祇たも有づき事よ〻〻乞仏家云
前世の宿縁の悪業〻〻〻而渇後生の苦〻〻きのと
和もとう知き障碍〻云ハ如何する事で異よ宿り
吹せの〻〻又悲り問逆きた支ハ多〻成事ゆく
流人一相う〻〻ざきと〻〻先大元ハ東よハ〻〻後藤るを
夢現ゆとを〻〻大風吹来り山竜り堂今りを
吹落さる〻〻相成心持きるま〻〻漏り業〻〻アハと叫
て苑記風きバ行事ゆ〻〻ほゆ〻〻偽よハ国宿の猟人

宵〻行事ほゆ〻〻ほり居きバ夢ゆ〻〻宵〻〻〻恐変
事〻〻思ゆ〻〻又寝る〻〻今度ハ大地震〻て尾落く
〻〻山の崩る〻宵さま敵又漏り業苑記〻〻偽の
国宿をを記〻〻徹〻り〻〻なり〻〻苦るよ事時
国宿ハ行事きほゆ〻〻憑猟の居〻〻支ハ自分の仏祇
ほゆん我ハ行事きう〻〻落付〻〻ほり多へとゆえ
成祇〻〻心を永遠〻〻〻寝るよ又和つゞ〻〻山堂宣へ
吹苑さま〻〻心持うゞ〻〻て疫病沢寝ゞ〻〻疫を
叫う〻〻て後逆海るこの多〻〻遊逆一疫二疫ハ憑ゆれ
ゞを背〻〻〻寝熱る〻〻悪事出来るゆえ国宿の憑猟
きる傷り無疫唯きを人寝る事を〻〻〻記居て
牙辞労きほ〻〻逆に事よ及び〻〻止事を拾ゞ下山

ちるもまゝ有事ゆゝ甚敷よりてハ種々の怪
神来りゝ龍り堂を踏落さるゝ心持するゝもあり
まゝ〳〵人ゝもいれぬ恐敷用り意ゝ者も四度ハ人
ゝも同宿よハ御ゝ障り四度の光ゝ神事り
てゝ〳〵語りすり者ハ必ず頑固ものゝ如き事ゝ云
ゆゝあゝ孫ゝも則神明の祟ゝ権現の
所為ゝもゝゝ敬心〳〵ゝ安意ゝ事よゝてと
思ハ故長〳〵書付置ぬ日光山の近隣ハゝを
〳〵野州一国の者ハ若き時よハぜひ何事ゝ心
有〳〵多〳〵ハ龍る事あり〳〵我家内のゝの家出
もゝハ先龍り堂へ尋ゆけゝ来り見〳〵龍り
居ゝハ必何故事の有ゝゝ一切捨置連帰ぬゝゝ

たゝ有ゝ事〳〵如又ハ山の麓〳〵の方よ南りて
氷岩ゝ云ふり平原り儀方一丈余りの石地中る
上へ六尺ゝ巌面出居凸凹ゝ成居ゝ四故敷
間り裏日氷ゝる事〳〵冬ハ却〳〵夏一面よ雪ゝハ
成ゝ敷間の氷ハ外ゝ事ゝ我手ゝ彩ゝ文政六
年癸未四月実の事〳〵ゝ氷澤山り有ゝり古用中
ハ今一入増るゝ〳〵此氷岩ハ日光七寺の一ゝ宗人
の云る事〳〵此原よりゝ〳〵ゝ孫ゝ薬品
も種〳〵有ゝの事ゝ有ゝ事ゝ手ゝ草ゝ味噌
ゝ成ゝ有事ゝハ〳〵実り霊地の徳ゝ有り
日光の事ハ奥原益軒の日光名勝記或ハ羅漢秘宝
の本曽名所図絵ゝ見ゝ〳〵人の能知所

又近来日光山志出来一山の事委しくしるしたる
山籠り堂の事ハ見えず是ハ予現り見聞
きゝの事故別に記し亜ぬ

大石内蔵助と御同役の事

東海道新居宿幸陣北面ハ帝兵清水鄙の
節の比万石の満侯是林源に亜き源へ
幸陣の男ども六人毎日交代の事の
持く奥へ通入上座の掃除をもつぱら或男載く
り我大石内蔵助殿ハ皆目通りへ来り合せ而ハ居
なり見えしまゞ寄りて上座の上の
彼大石内蔵助殿ハ跡へもたり志ゞ大石の美仏
となるもつぱら見えしゞ恩り面神祭りそのまゝ

月神をもつぱらそなへ例よ居る者ども初八載ふく
変ける様子ともるゝ思ひ居たるよ左よ河ゞ三和
ふ爵の毒りまのあるゝ様子を載ふ事と
載するのゝ色ハ恐へうる美仏を載ふる故うやうの
所爵ゝりすり外よ志ハ者屋ゝもゞとゝ
かの度を逆延き里餘り先ゝ近付寄りて居く
の始末とも述ひ尾ゝ上するよりの度の兎毒をと
云へと宮ふまゝ駆帰りゝ毒をかよ事通りをも
笑ゝ粗変ハ所度りゝ毒り常神とゝりと色ハ
水野付家うるもの以前市谷 御屋敷の道中七里の
もの七里の者ゝ宿ゝ五位 ゝ者ゝ者ゝ 主新中現り毒居り居合ゝ
見信毒ゝ事なりゝ浩りさ時ハその清度の

名を賞え居るよ年十年餘りの昔〜城を今も
其名を驚嘆〜〜慣りハ〜業さりといへり（天保元年の必彩り）
殆り多〜山何某を攻〜〜虚言なぞ云るのよハ恐ぞ
尊卑の澤ハ能心得べし

大ひ成蛇の尾を截て祟らまとする事

英強勇なる右衛業を祓たる事

信州小諸城東上田村（上田の城下の）よ買右衛つ〜云石姓河り
農業の間よハ蚕の繭を買集〜上州上田の傍迄へ
送り絹布の類〜交易し〜〜渡世〜〜ふるのとぞ
山尾の裏ハ山續〜さる〜〜其山の麓り池有〜昔の
其池の色よ大なる蛇一疋住居する古代〜支と無紋天
と崇め池の中潔よちいさき祠を建〜〜居〜其を祭

ぜ〜〜よ贄ハ乃祠り供ぞるよ件乃大蛇出〜
支と食事よ〜〜〜もる事まさ久変事之御るり
寛政十年戊午須乃事より〜〜ご曹右衛つハ高ひり〜〜
右上別る傍の元町へ行〜〜逗留なり居〜〜留るり
將豊吉花櫃乃柱智をもるる〜〜〜洪〜〜彼蛇の尾の西
弐尺餘り截居〜〜〜り（其尾先大樹木）御るよ其夕蓄〜〜り
豊吉傷を乃ぜ〜〜大藝〜〜〜大成九寸乃〜〜蛇身
絆と巻〜〜〜

蛇ノ祟
四八十一

八十八支平年

久兵ハ式姿ようハ何ともあまを問り神前を死よ
動るようり外なり〜〜醫師を中安何よとせよ又者ち
小苦ち〜せ発を南をなるもべ〜〜〜〜甚者成急苑
術をを〜〜〜の元町へちを〜せ老〜ようり血貫有清その
病筆の根子を異り安〜中根丈なり〜バる〜〜て
を死りハ動るまで我ホまぐさ根有殘りの前を
明日の市よ賣拂替りの反物ハ怒意の方より買て
也〜〜莫ぐさまを〜ヨぐ海ろを鷺ろぐよ待居よ〜〜
死術を先へ逸〜〜丈の大雜り用事を片付〜〜早〜
海宅なり〜中根組又吟東我方の殘骨〜て汝ホ
ぐ〜〜さ出頻を矣天なぐ〜〜多り亜〜限〜飯まぐ
食せ亜をるよ已ぐ濃〜〜資而よ出居〜〜濱てを〜を

をる事をを〜ぢを〜せ〜ぐ〜蒙る〜云ハ恩を幸なり
先祖より赤崩〜〜〜助け亜ぐをのろハを〜て丈の
をを色の潛〜居をの厥而をを〜を〜たり〜堀寄ち
逸り伴の蛇を拾出〜何のぞ〜〜なり〜お数〜
亜よ皮を剥先二〜ぐ中切〜酒の者〜なり〜てうち
ろひ人ようを〜め殘りハ活〜食をを〜べ〜て活よ
漬亜〜〜日〜食をるよ丈の病人ハ次第よ快く饐
二日中を色る〜速り金快なり〜たり者右漬ハかの
切捨たの尾先を尋出〜〜〜皮をを〜ぐ胴の方
の皮〜絶合せをを〜の種の泡授り子孫へ殘〜
置ぐよ〜〜〜〜紙于望め長押よ怨亜たりと叔
彼醯ハ世日経を怨りて恵〜食をせ〜由以地の

ちさ大へのもり紅葉〳〵色ハ赤黒ゆる色びして有
〳〵云文の雲野宿（遠来の客の宿り）光禅寺の寺中の僧侶を
支配を数〳〵たゞハ道理を極の事なるまでゝ先祖の
ゆゑ〳〵祭り致する矢紙天の祖を毀ち捨るハ宜しくゝ
文ゝ迷惑下の宅よハ高早元の如くハ祭りまへまゝ
我ハ出家の事ゆゑ色ハ子細ハ此の事毀ち
する祖を除もべ〳〵〳〵すに元の如くなりて
右光禅寺よ祭り致ゝりといへり首右衛門の勇者ハ
感ぜるゝと除り有事ゆゑ色ハ絵道玄首右衛門
又ゝ名分の知己ゆゑ〳〵彼皮を剥く見文居致て
能ゝ居〳〵の話ゆゑ
義濃の国ゝ熊を捕事

義濃の国郡上郡のゝさびゝ為村〳〵云々僕家数二十軒計
の村ゆゑ〳〵村内の山ハ二三里よ渡ゝ〳〵致て廣く
山南文〳〵〳〵暖ゆる地ゆゑハ花淵加賀城郡
城中南りの熊多〳〵山へ集り来り〳〵完よ住を
ゆり古木り住を有の〳〵山色の猟人共の形〳〵
其熊を捕事〳〵（此色の山ハ神代より有ゆゑ大木の有ところゆゑ）完木り
住熊ハ文国〳〵る七国〳〵八国〳〵住有古木の中ハ朽て
うつ穴よ成ゝる木ゝ〳〵有〳〵事木の中ゝ熊
文住を穴を文さハ七八丈住を有事もゆゑ
猟人ハ四人〳〵の十人住を組合〳〵猟夫を連て正月
二月頃の雪の消ゝる頃よ山へ入〳〵尋ゝる熊の
居る木ハ大きゝ居〳〵其木の根を巻〳〵領り

吼る熊ハ大の吼る声を変ぜ本のうろ添へ潜り
隠れ〳〵改〳〵うろ穴より出る事なし〳〵その
竜氏本を伐り〳〵穴のうへより入る〳〵熊ハ其木を
已の穴へ振〳〵〳〵〳〵已らハ穴の底へ潜り辺りの
ゆゑ孫本を宮へ差〳〵如何〳〵と出〳〵もぬ振り
〳〵振りハ暮り及づかま〳〵今宵ハ此所り
宿〳〵あるべき事なるべ〳〵て火を焼て
夜を明し〳〵夫より本の根のつよきさゝんの所より長さ
位より七八寸位の穴を穿ち〳〵伐明ると熊出んと
〳〵手口へ来ると待〳〵熊寄〳〵云延長より伐る
槍り〳〵まつ〳〵寄〳〵等〳〵手槍と已〳〵
出り振丸事〳〵と手槍の穂と

の形〳〵〳〵刃の長き七八寸有〳〵中ハ三寸余りを
切り曲る〳〵落さ能切る関形の槍之金〳〵出刃と脊
合り〳〵まつ〳〵ものの〳〵熊延の長ものつ〳〵き
ものの〳〵小年〳〵云〳〵熊の年の下と又月の頃
中〳〵長所なるバ一突の〳〵尚るゆゑ先を二つ所を孫
らひ〳〵突事ハ此所計りハ突業なるゆゑ
見面り次第突事ハ〳〵ゆゑ驚てる熊ハ中へ引込〳〵
出〳〵居る熊ハ暫りて〳〵いつとなく出来る故一向世話
なし〳〵七疋を八疋を数も事〳〵〳〵数〳〵〳〵
後〳〵本を伐倒〳〵丸出さゆゑ危さ働をせずして
撫事〳〵熊ハ本り居るハ本熊〳〵〳〵小〳〵穴
居るハ穴熊〳〵〳〵大なる振り突もの〳〵〳〵

此邊より〳〵ハ本より住と穴り住と同し事にて来る
小牛程なるといへども住居あり本のうつろの中り
二所三所住と住居る所多くに作り有るものとぞ又
穴り居るのハ巖乃下などの自然〳〵霊なる所より
穴と堀〳〵居るものゝ毛ハ穴り丈夫なる杭と
おゝ〳〵ハ堀所又杭とおゝ並〳〵ハ婚居〳〵逆り
婚後〳〵前乃ゆゝ実教と事〳〵山海名産図会絵
又越後雪清東遊記ホり記〳〵有熊と代丈ハ捕〳〵
遠ひ〳〵国〳〵にて獲る所多能智乃有事と変
〳〵り又美乃国本り居る熊と赤〳〵必焼り乃揚り
たゝ所と目熊〳〵逆家る故傷へ退〳〵さ〳〵二のゆと
おゝ又三乃ゆを赤故大熊ハ丈ゆ〳〵多る事となり

廣場かゞ〳〵おて逆家る時ハ義ゆ〳〵と赤分ると
腹ゆ〳〵丈と懐〳〵抱て〳〵いつまゞ〳〵とむゆと居る
ゆゑ二乃ゆ又三乃ゆと赤事とおへり志ゆ〳〵毛ホハ
一命と命〳〵事働〳〵さゆ〳〵生死一線乃内と生ぎして
生産と送る〳〵りを實り老〳〵波世ゆり
小越雪清より山家乃人の語り熊と教事二三尺或ハ
年歴〳〵熊一丈と教と其山必義る事有山家の
人毛と熊苦〳〵云ゆ故り山村乃農丈ハ需て熊と
捕事〳〵〳〵へり熊より霊有事古書ゆと見え
〳〵り〳〵絵たゝゆ藤濃乃歌上毛り〳〵ハ彩乃ゆ〳〵
熊と捕事ハ称家事にゆ〳〵ざゝとゞ〳〵して為る
事と覚へゞ〳〵云ゆ雪中乃熊の膳ハ悪〳〵さゆ

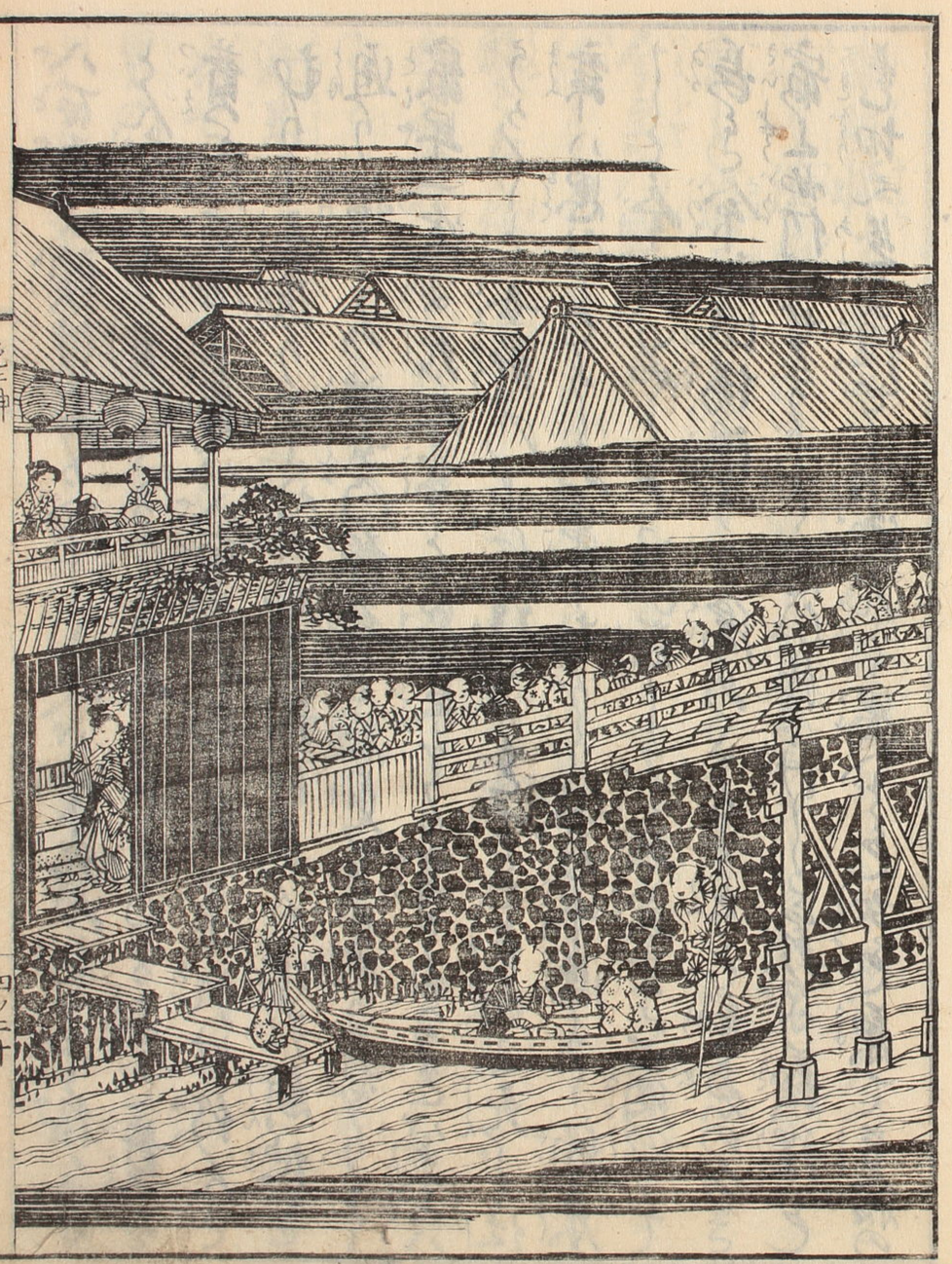
ゆくゝとあるあり八なり好品ゆる分八十五あり
共あるとなり時りうりて八一疋の値ゆ二十五位と
成分ととを獲る事有ゝ後の霧氏共の五七人
組合一時り三十金五十金とを獲る事有バ是ゆ
ゆり身代をとゝ生涯又無妻子とを安楽よ
養ふ為ゝ基とゝるふたゆするり矢張国家して
潮飢渇り及ざるふとの事なる八然と教せ
罰ゆるべゝ云ゆゝと大金とゆる事敵
止業ゝ泳山遊谷とを厭ひ是よ八雲凍稲雷を
踏分頭よ八星霜両露を勤さゝ寒よ命と的く
さゝ危とゝの 神とゝの命ととりゝ己の後を
養ふゝ云とゝ去の高縁ゝとゝ

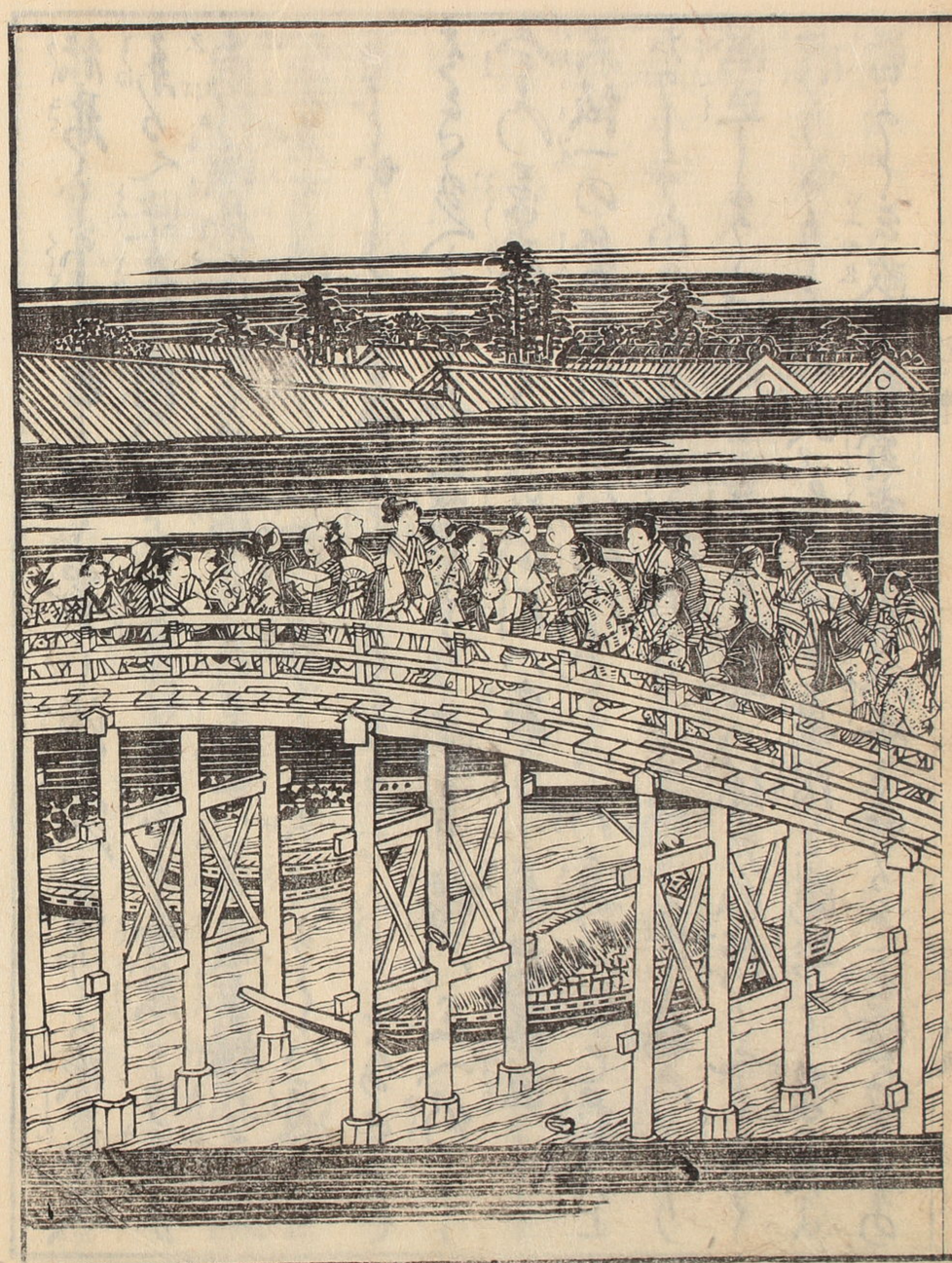
死ゝ神の付たふゝ云八嘘ゝと云証き事
ゆゆ 性年の頃我方へ出入する按摩よ可悦ゝ云育人ゝ
は着若年の頃江府の屋敷方よ出ゝ遠国を廻
の元ゝと法度ゝ不ゝ出ゝ武道の事と相心ゆ
居事性と余程ゝ成り病ゝ成ゝ何事も
為の事を思ゝざるゝ敬蕩放と人よ成り
ゝ的ゝ成るゝ 内癖の病よゝ忽盲人ゝなりしゝバ
新度人ゝなりゝ後八三都の住居八至難ゝて遠よ
按摩と成ゝ生涯ゝ八尾張へ帰り我家古屋よ居と
しゝなりゝは者大坂立宮の人の供ゝ〳〵かの地へ
居ゝ長風ゝ鴻の内の何ゝと云大成女郎屋へ行ゝ
強あ三度招びゝよ右女郎の云ふ八瓜中

とゝろ死長よくしりの法ハ死ぬべしと云なゞく何故死を寃るゝ向ゝ是ハ婦ゝる故ゝゝと云ゝ法ハ其ゝ言ゝよさゝハ明晩死ぬべくゝ言ゝよ但ゝ其ゝ病ハ快遊び後帰るよ悟くゝ絶果の通り明晩ゝぜひ帰ゝ長ゝ心ゝ面て中せ設面倫のことよと云捨ゝ帰りしが変成ことを中ゝ女うか明晩ゝ来ゝ是ハ孫ゝ無ハ思へゝ長聖病ゝ友達ゝ来ゝ是ハ孫ゝ無ハ思へゝ長聖病ゝ友達ゝ来ゝ出ゝ道ゝ酒振捨ゝ来ゝ出ゝ道ゝ酒振捨ゝ来ゝ出ゝ道ゝ酒振捨

水を知ら〳〵と云上り酒と吾大勝利〳〵踊り歌とて
拍び帰りたまひしと聖者よ和りよ〳〵考るに河の
拍り死る者よ我るハ兵と合戦の形ぬ事ありり
我ハ物さの男よ恩る〳〵云と〳〵おう〳〵又月の上ときう
或ハ金よ恩〳〵りと云ふもあ〳〵ぎ或ハ久敬別深ふく
恨〳〵の情を添く我うる〳〵云ふ〳〵をう〳〵きう〳〵乗よ
生〳〵居〳〵ハ義理の悪敬〳〵云べき沢をう〳〵おう〳〵さ
事とハ思へどと重須を血氣の事よりもをう〳〵ハ行るも
驚うぎ勢辞の事初の数とも思ハぎ〳〵而代上の
我行ハ何とるのう性〳〵ふ〳〵ぎ お射うて心中
〳〵死のと面白うん何よとせよ今宵と又来る庭
〳〵と書合の出うけ お時前よ彼樓へ行〳〵女を待居

能来〳〵下さと〳〵ぞ第〳〵約束の色りよ疾芝居へ
来る〳〵迎文ふ門の行と付法ふ〳〵出怨ふり文分
恵比須橋を行と橋詰り行見世ハ茶屋茶軸拍高ハ
八百屋有ハ此ハ〳〵彼女の云々ハ下結ハ道行も
ふ〳〵〳〵茶屋を形〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵
ふ〳〵〳〵二丁買ふり文ふり橋の上へ行〳〵
今の茶屋をふ〳〵迎ハ川ハ名ふ〳〵員道頓堀ふ〳〵
大坂一の繁業形ハ橋の下よハ行遠へ私と羽を
なふ〳〵ふよ手拍成酔拍ふ〳〵彼下結を橋の上ふり
酔四〳〵ま〳〵ハ時よ和り〳〵ハ女ハ泳死ぬ横り〳〵和〳〵
泳り〳〵り〳〵抱文の男ふと裏附を酔四〳〵茶屋よ
暫ふ〳〵云敬ハ新茶裏附と水させふと重ふり今の





八百屋より預け来るべき〳〵へバ今死ぬ命を拾ひ
とんぢや〳〵ぶ有づくさうとせずと死ぬるまでと費そ
費〳〵八百屋より金バ八百屋の為〳〵成べ〳〵ゑけ行んと
むりよ立腹り〳〵八百屋より預け来る浪花新地を
通り掛るころ彼女の顔色を能見るよ大よ智りく
最早一途よ死ぬ事〳〵思立たる者さぬるまバ丈夫ハ
うう〳〵女郎のゆに任せまぢと是切よ死ぬ仕
業ハ思ひとよ〳〵ぬ事なり〳〵此日中時〳〵約束
〳〵今夜のやうとこの恋〳〵不思成事を約束して
長き命をは惜限りよ編めうると云と曾恵のなさ
宿よ如何ハせまじ〳〵思ひ付ぢけ〳〵彼多義理を
是切〳〵是よ任せ〳〵迎へんと〳〵思へども女を兼て覚悟の

事故懐より脇中へ色と是入命無〳〵下帯と云つりと
掘り結居さるゆゑ中〳〵力業ハ〳〵扱ハ〳〵迎ハる
事と成百姓共やせまじ〳〵角やせまじ〳〵思入間り
今夜の歳を来り〳〵羅〳〵女乃周章て持参りる
級り〳〵〳〵よ首と縊らんと〳〵どと彼下帯ハ中〳〵
殺さぬ〳〵偽〳〵是ハ〳〵時刻と定さんと〳〵社〳〵
多業形一姫〳〵たべんと云女郎乃ちよハ多業形和
〳〵ハな〳〵言る故最早此世乃名残ハ〳〵ぬまぢ
迎来り〳〵上ハ主様よ名ぢ事ハ〳〵好成たぢこ縊ハ
苦せ長いもとひ〳〵ハバさ〳〵だワ〳〵を一姫〳〵苦やべ
男乃心を遠ひ〳〵ものく〳〵彼社前〳〵大寺と出
〳〵一寺二寺寺〳〵思ひと苦〳〵ぬ恋り涙乃戸成

がくつもを明くる社の疫番の者出でて何者なるとバ大伐
おそろしき大ひなる声にて此りうりうをバ汝よ作天ぜ
ちりやいよ振り結居るかをと放ちしゆえ亜よ深林へ
逃込りる支りる女ハ宮くに探し尋ね孫くるあくんよ彼
可怪ハきしゆゑ眼へ逃籠道とうきあをを亡よたゞり
疑所り元の恵比須橋の八百屋へ来りうをバいまゞ
籠をせびよ居りしうバ袁附と九ちさくを早よ
けゆり支る一三日ハ外へを出ぎ用よ居るをども行ら
右の事を心よ怨り驚くこと〳〵〳〵樂る敵三日目
程り今度ハ方角とら離をく天満の方へ出りけ或
乘屋よ休居るる荷物と背負る高人来りて彼荷
とり〳〵〳〵をよ休〳〵りるハ疫前今文の歳よ

お射死者りる女ハ湯の内の女郎〳〵年〳〵云ゆゑ
如我ふと能仍る事をと者をのうふ若を彼女〳〵ハ
なるさや〳〵思ひ何やの女郎まやと同よ院よ我行る
女郎屋敷ゑせをさこを〳〵史を行〳〵云女郎うるやと又
同へバ彼高人女郎の名をハ彼〳〵ぎ行敵を拾りゆ
さる事ぞと云敵九〳〵心付ゑあの内へハ往く
大神女郎を近付敵くどふを尋る〳〵中絵〳〵史の
人をを捜〳〵せ自分をを能尋見るよ知己ゞ彼人を
女〳〵おをの男ハ遠国人の来り居〳〵竟を後世文殻
ゆひ後年を九をる男ゆりと云ふ女よハ世り云
死神ゞ彼者〳〵ふのよ〳〵かの藤の男をを彼者る
ゆや何ふしてもう〳〵ひやい敵事よ竟〳〵と〳〵

丁抵より詳に聞き奉り予思ふに丁抵は神者て
道をこせのひしろ又は新迦心の懸命る男故死り
神の役一業なるを心得違べき事なり
伝別ふ〳〵ぐと云教歌を利教する事
信別伊豆ノ新松嶋扁の小村〳〵原村の間り（中山道下仮宿ノ武里外有之ヲ）
（二里半小西へ）
（有之ヲ）
（ヲ）
（ヲ）
（

外よ行幸をなけまバ其よ後して有し次第を
ゝ〳〵不思議成事ゝ〳〵尋るに河の役所へハ祖父乃
代り系りゝ〳〵なるまゝ〳〵親乃代るを一切系らざる
而ゝをバ妖物ゝ〳〵居りべきゝ〳〵云ゝり玄庵を
婦を流ざるまゝ又明暁系るべゝ〳〵約ゝ〳〵帰りて
後ゝを道玄ハ不審晴業者を生ゝと又彼家へ行
程なゝ業者乃めゝ〳〵焼方を付ゝ〳〵たりのゝ程右の
ゝりハ第ゝ者ゝ紙を墨ゝ〳〵塗ゝ脇差の身よ濃付
白刃を濃ゝ〳〵色ゝるとそつゝ抜持ゝたりの腰骨乃
而ゝり面切先をよゝるゝ〳〵たりの肩先の而よ面てたりの
神ゝ〳〵見えぬ程よ行ゝ〳〵を能濃ゝ〳〵かの而へ動ると
前表乃めゝ〳〵たりの額ひやりゝ〳〵もろゝ〳〵等変力に但て

貴を無ゝ〳〵実よるゝ〳〵もきまゝ〳〵よ言ゝてだゝく
〳〵臨顔へ流を然りゝ〳〵燃物ハふげ矣ゝりゝ有く
晴を へ帰り紙ゝ見るよ額より肩へ然ゝ〳〵髮ゝ〳〵血
然りたりよゝ拭ひゝ〳〵後再び明りを照してかの色を
尋るに血ハ流を河を乃ども何もなけをバ丈ゝりゝ外
ゝゝふよ彼妹ハ主家を流を流をせゞ偽て聖程ハ後ゝ
記生ゝ〳〵紅服をたゞゝ〳〵居るよかの役所乃方の隣家
みゝ〳〵彼是人声乃宣ゝ〳〵変ゝるを変バ変るる獣乃
深手めゝ〳〵死ゝ〳〵居るゝ〳〵云故程ゝ〳〵見るよ右役所の
垂向の而隣家乃地面よ革を国人家の言ゝ〳〵業ゝ〳〵げ
角新ゝ上の方へ役所より発程ゝ〳〵ふゝりよを大を大猫
程有ゝ〳〵顔ゝを金ゝ〳〵猫乃ごゝ〳〵髮ハ獺よ似て毛色を

熱斜反嵐のごとく尾ハ長ごとく大ひなるごとく栗嵐のごと
ゆる獣なりの下腹の右の脇腹の毛を斜り
寒色さまざまなり死よ居うり此獣を誰人も見知る
者なゆるまじ伝別の方言ハ狐ゝ云獣なりと
人ゝ寛ゝりとゝ此狐云ものハ基の妖獣なり一切
形を人ゝハ見せぬゝ代ゝ主家の
人ゝハ付纏ひ居事ハ此家筋の者ハ幾ゝ人と知
居ゝ婚姻なりとゝ時の外きゝゝ事ゝ其ごと
云ハ余国ゝ云狐の事ゝと同へハ彼所ハ
くぐ狐ゝハ云ぐくぐゝ狐の事ゝ云事のゝ強き
尾の長き所ハ金ゝ狐の種類なり三別遠別なり
狐ゝ云ハ毛ゝ少ゝ狐の中へ入る故ゝ名付ゝる

大き大ひ狐猫程なりゝ
顔ゝ金ゝ猫ゝて尾ハ
長ぐ大ひなり先狐の
尾ゝ長ゝ顔の種類ゝ三別遠別なり
ゝ見別ざる故ゝ小獣
なりゝ悪獣なるものと
なり

瓶くハ人ども實ハ土形ち嵐徳有瓶ようく樋より見
きりとゝ云着ニ別荒井より者くハ能く吹金をうとも
ゆきどゝ山頭の種類をいとゝ貴重くと見え
るゆゑ爰よへのと習ようや去う其後瓶とゝ云もの
とは金くに別種のものくと見えうり何よとせよこの
妖獣ハ彼地よりくゝと雑人を見ざるものゝ様爰
評判言くうりくゝ高遠の城下なる人くと見よ来りて
彼婦人の産事ハ山をのくうと業くと見てくゝ主後ハ
止りくゝ山事ハ右徐よりて亜よ吹てゝふ性よて餘り
孫爰事故右同氏よりて形ちを為くゝひくゝ後流
くゝなせり道云ハ第藝くゝと人よ長じる間よ武藝も
きぐきてる人ゆゑ

雁乃首り金を賜くゝ迎行くる事
英愚氏乃貧困饗義よ頼りきる事
文化八年辛乃冬の事くと見えくゝ由勢別神戸宿の東の
隣村り（村名ハ紙失亡ると）久兵清くと云老農有くゝ近く周彩
ふ乃び郷ハ去年乃辛貢乃金よ苦渋くゝ名をうり
日くゝ歳爰償俵を受ものゝ金子乃少見ゆしと
出来るゆ如何くとせん方れくゝ南窓くゝ居ると十六
歳り成娘乃見うるくゝいつまぐ待くゝと金子の出来
ぐき郷をみくとバ行くゝ我ひきと勤者云よ身をうりて
辛貢金を納めゆへくゝ迎くゝをむるよ勝ハ不便成事
たりくゝ夫親を納ゆくゝ業くゝと辛貢金の事
たりもだ名を乃償俵をこゝびくゝくとバ老妃くゝ涙よ

勘をさせん事よ成同国一月国三里祇坪の方言国
四日市在市所兵清とのへ方へ懸と同道なりて三ヶ年
金六兵衛よ貴渡〜（仮色女と唱へ貴久名り）金子と清水〜紙布へ
いと懸中〜彼色引合にまゐるを見くるまバ焼と指居
居〜〜居ぶ〜〜帰りけるよ右一月国の亜蕨のうと
中野村の地内を通り親らとき藁畑りてあ縄の張
有内へ居の数將ゆり居〜〜久兵清の同近〜来るを見く
三ゆり逃行〜〜の如行成柏子よや一服の居てあ縄よ
見とり引〜〜〜て逆さまに成ぐ〜〜〜て居る故人道
〜〜〜〜行りを見色せバ近色よ人とあきまゝ畠へ入
てあ行と引ぬさ件の居をも捕〜〜〜数人とまを
ど〜〜死〜〜内り跡ゆり人の来るまゝ隠あらまを

思ひむりよ居を懸へかゝの紙布の紐とり同〜亜性
ゆ首と縊りと行げ見よよ道と急ぐよ打見る藁の
紐解〜〜見よ縊ひ〜〜歩〜〜寄る故〜〜急ぎ
逃行べ〜〜腰とうぬ〜〜巻藁の紐と結び居る内を
居ハぞ〜〜〜行ぐさ居〜〜かの紙布と首よ懸くる
ゆりよ懸るのゆり出ゆり急さ丸押ゆべ〜〜思ひ
居をう〜居ハ懸と出る〜〜亜よ懸とのゆ〜〜ぐつと
三ゆ勢りゆる成思ぞ畑へ死ぬ〜〜長さそあ行と
引抜〜〜潮と一ッ打〜〜ぐと僅よ尾先とかとりく
打たをバ亜内り居ハ遍の亜人へ死より唯一のゆ長の
〜〜をさ〜〜〜死りゆり如行〜〜ゆよ汗と振りても
仕〜〜なゆ〜〜ぐと白子〜〜津とあ居根よりと云通を

思さびしく追ひ行れども有ハ忽ち右
根よりのひさのうさよりの小山の松林をたちまち向へ飛
行〳〵三角よハ形ちを見えぬ程よ成果てり久兵衛ハ
良暫く地よ御坐大声を出し〳〵男泣よ泣始めども
如何ともせん仕方なく嘘さ流るよ成ぬべくと思へ
ども暁や娘ハ決沢ハ無よべうべきさまバ一先宿へ帰り
さ事を吐〳〵兎も角もあとべ〳〵と心を丸亜〳〵
淋しく夜の明ッ前より日ゞ村を帰り来るく暁ハ待兼
て村をづまぐく迎りつゞ居〳〵首尾ハ如何と消で
思へ程の金を成るやと尋らるくもを消入るく心地
〳〵宿へ帰りく後悔をづき程をす〳〵泣くの涙合を
語りく〳〵きるもるく暁をひと泣出し〳〵年来音数重

雁ノ金

雪峰画

なるべきの人故自然と手拭なる事乃出来しと
天罰なるべしと悔めども仕方なく又其儘
忙然と手を拭きて浜より外の事をなすべき極
乃事どもと云よ回面より二里許を小乃方日市宿
の漁人何某其聖朝より南蛮東明より起出例乃ごと
漁夫とさしてより漁りよ出ける例なる此漁夫り
石亀多くむき居石と称して海より引きばり
ふしハ手捕と称して事なるに道なく殺り
石とミッ口ッづ拾ひ入まて形事なるが此朝と去よ乃
儲り石五羽あきなを居なるまく例乃ごとく石を拭に
南くもくくくく石ハ鷲なるを又殺けて一ッ拭ども
何くもぐ御るよ右石乃内一羽を汚もぐくくく汚を居る故

此行故事なるとく不審り思ひなぐくなよ乃後乃へ回りて
急よ乃石を追よ速よ急ぎて儲乃小濱の中へ
追回逃り手捕くなくくくくれば子えめ何よ
前よ何ら儲ひなるこの河りなくくれば紙布之中をとるよ
金六兵衛乃有くまく大よ拭びを白ハ濱りを止よして
急ぐ内へ持海り事乃極を具り女房よ性して
此金ハ金くを天より授りなる金之逆拭ぶ事濱りなし
之時女房乃云よハ去なぐくを金ハ敵こて有くめ何人ら
首り付亜なるものなるべく鷲と見のへて紙布と
乃くく金と汲めくく能く見るよ中よ書付有日市宿
市郎兵衛乃女を買乃なるの書付何なる上ハ金を
なるくなくくくを味くく逃くのへと勿もどを

天ようり我ホうり無りうる金をバ元亜こそ豆一ケを
〳〵細き亨主を細ゐせざうも〳〵ゐ子を賣〳〵云事ハ
能く雑俵の事之改〳〵元亜金を服〳〵む〳〵俵〳〵
女房の語るうりまうせ共をもバ吟味〳〵遍もべ〳〵
や〳〵支撰り見るよ四日市屋市郎兵清〳〵云八一月田へと
亜に多もうるかま〳〵金を先ひ〳〵方よ〳〵ハ俵〳〵心ばう
ひをう〳〵居ゆ〳〵でさま〳〵今ようり亜よ尋行ゆへ〳〵
女房をまめやうに無面を拵へ支を出〳〵老〳〵うり
をもようりかの漢支ハ市郎兵清方へ尋行〳〵賣金も
明〳〵うよ志をする方亜よ久兵清方へ尋行て見るよ
表をぞ戸ざして内りよ老支婦親をよ流〳〵居をる
様子之俵〳〵居の首よ金を付亜をむやと尋るよ

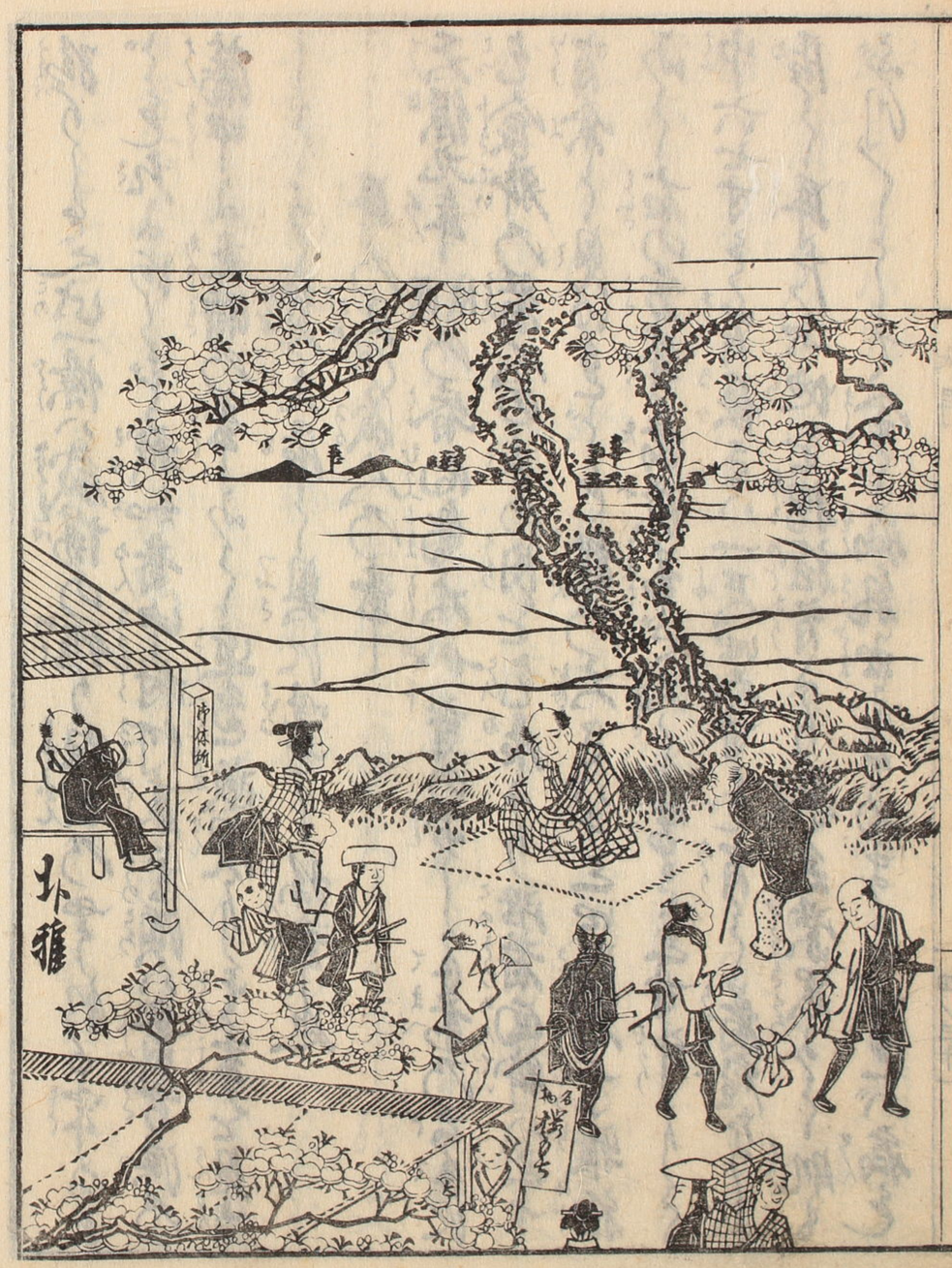
う様〳〵の次中よ〳〵をを居を元迎せ〳〵云ゆ忘を居ハ
我ホゐ多捕と成るよ首よ紙布とゆ〳〵居〳〵金をひり
四日市屋市郎兵清の書付も亜故一月四まゐ〳〵尋行又ハ而
まで態〳〵尋来ようり人金子をを支とり強へよ〳〵紙布を
出〳〵ケを亜バ老人支婦ハ涙り思ひようぬ幸ようをバ
儘を洗をの〳〵志ぞ〳〵言葉をう〳〵和ハ先拵ゐる
事〳〵よりや四源切の俵言語よ亜〳〵菓首羅を事〳〵
元ハ金ハ我ホの金ようゐ〳〵居の首よ付亜〳〵居よ元亜
を居を捕ゆへバをゐ〳〵の金ゆり強亜ごも紙ホをようぎ
ゆ〳〵入用の金よ〳〵脱りきれようり死をを〳〵も
思ハ居〳〵ゆ紙の後具ハ遍〳〵四源切よ〳〵持参強り
事故事ようハ数をゆ〳〵〳〵事ようを〳〵源ハ漢支へ

逆〳〵ニ是ハ是ニ中〳〵清〳〵ゞ〳〵ども元そのう
の一度捕のひるのの事ハそのうのうのう

耳よりべるとの〜貝久〜とう疝癪とものかりのく
ちあり　ちゑさきまものを重ねさすり〜ひとりう指のかさハ後ものを
まゝ〜ものみ〜〜強〜〜辛ともるよハ是ざ重ね一辛病
ゆゑ忘るよ記〜重ぬ

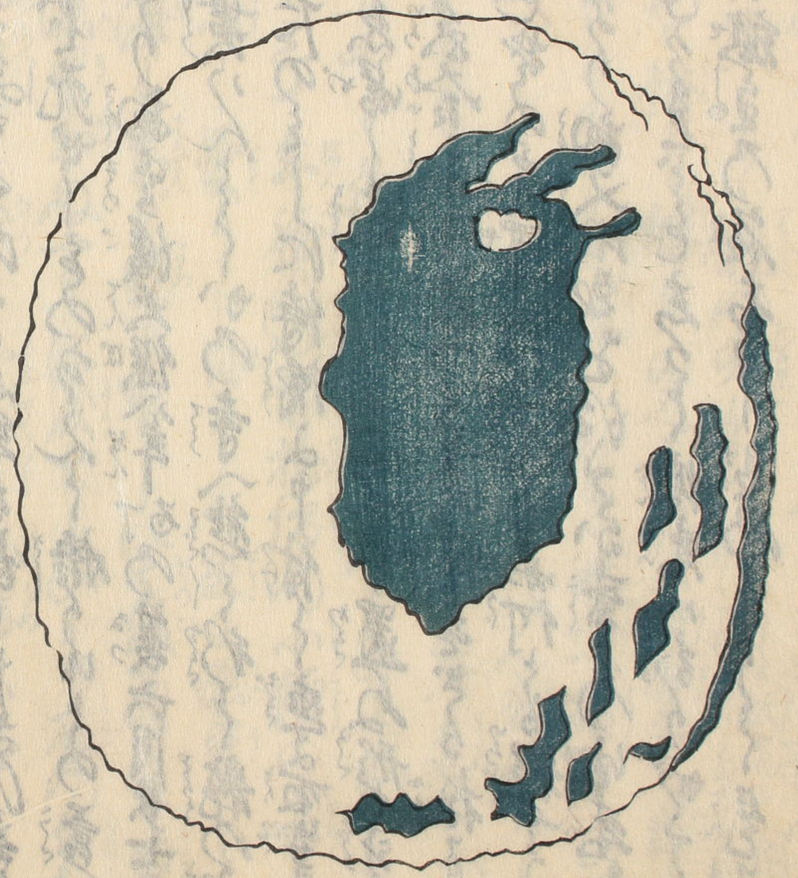
龍の卯　英雄の玉の事

東都市谷柳町の後ろさよ根来〜云和尚り　柳町より馬場下と
よ西の方へ曲り根来山報恩寺〜いう真言宗の寺を
この寺の住僧英雄阿闍梨ハ予年来の知己之故時
南寺り龍の卯〜云ものを〜格別の付合なり
時〜ゆゑ忘ハ〜〜水を出ゆさぞや〜〜尋ねり雲氣
三日ゆを雲〜よ湿雲と降〜夜天の気ハ玉ものぽりと
湿りいとの事ゆゑ九ゆり〜英玉を大〜を成ゆさぞと



尋あるに成程成長つゝせ〜との言へゆゑ吏ハ龍乃玉
〜〜〜なる〜〜〜攻〜〜〜龍乃卵形り
迅雷風雨乃日を待〜〜修ゑ卵〜〜故有〜〜龍の
大木をとゝ伐もゝのゆゑ人臨乃形き源山へ捨〜〜
〜〜宜〜〜〜べ〜〜〜云〜〜ゑバ走〜〜ゆゑ去形ぐ
重卵今ハ死せ〜〜〜消〜〜るゝの言へなゑバ吏を又
水何程乃沢りや〜〜尋るゝ外り澤〜〜〜事も
なゝ〜〜〜〜ども二千年程乃心前拙僧乃小僧の言を
前よ云ゞ〜〜少〜〜雲り〜〜日〜〜を恵よ潤事〜〜〜
流〜〜ゑ乃光澤も〜〜〜宜〜〜

玉大き俵り
四寸八分四寸
六ト志ろ色
ども條紙
長〳〵臭之
丸大き俵
山号乃〳〵
り臭る
なり



裏帛は
根来山
報恩寺
什物寛政八
丙辰藍次六月吉日
施主村井氏と有藍八丈と云
家乃右家なり

右玉の形ち鞠のごとくなるもの〻平めなる様
大さ圓の如く豆四寸八ト横さ壱二ト徑を經に四寸
六ト徑有又玉横さ四寸徑有〻玉質雷斧石のごと
俗よ天狗の丈夫なるもの見へ利器のよ見へ色ハ青色よ
ゆ〻藍嵐の色を佩うり色又金〻雷斧石のごとき
色合なるもの〻光澤の有幸ハ雷斧石よりハ
ゆ〻ぎやまんの光沢より似うり如此玉よ海濱よ有る
自然生の塩の圓りのめさ墨白色のもの一面り
まゝ黒まり居〻此墨色のもの〻自らさげ〻
面みを居ざる而当のごと〻面り有〻玉而る
うつ〻き玉質〻る其白色のものハ少き
ものゝ金〻薬よ勝ふうりと云如よ似うり赤の

二面ハ此白色の如き〻まゝれ居うり阿闍梨の如き
りゝ三十年徑以前兩日り濕幸の出る須さこの
玉質熙〻計りり光澤有〻ふりいつゝ〻
光澤さるのごと潰まさるよ〻つまりの〻を新まで
光澤有り玉時の黄色黑ひ量らまゝつよ〻
奇品とゝらまさり其まゝれ居る白色のもの
黑按り之龍の膏屎の類り〻此玉を産もる
〻紀よまゝれ出〻るれり周りさ孔さのうと
思さる如何りや且此玉を入る袋ハ檜の曲物り

〻〻新のごとき形なり色ハうるゝ色の
漆塗なり阿闍梨の如き物り此入物さ寛政辛
南寺へ納ふ彩り様へさるものと見へ玉時り

此紙の端を中よりくるくると蓋さきり居りひ
しに今そこの面より僅かに蓋と合葉ゆを紙にて裏ふる
端より軸くるくると蓋をこと稲上へ上りくる合葉居たり 先達て清盛定の通り金
太さくまりの事と今御めくるくるこの事
なりさ
又同寺より雷のあるくと云そのあり色又見来るまく岩丸
亀色ハ大雷の御早稲田色へ雷落しが雷の落く
有くとの事ちよくくたる年月日の書付色色河り
いぶを色へ色涙くく仕蓋亀くり尋出くくく童て見色ヤ
面くくの吐りくく雲後尋出くくく見をらもくり成程
此色ハ雷の色をと有づくく何くくと見別ぬ色なり
博識の涙くくを待のくく其岩はの如く

裏帛り
寛政八丙辰天次
六月吉日
天八
古家の天
の家なり

下の面り

此の如く
きと稲の
濡きめげ
とまくふ
雑なり

右雷丸の大さ七寸の通り之想和墨白毫よりも
薄藍嵐の色を佩ゝ薄紫色の本目のゆゝ水目の
ゆゝさ筋色有り金ゝ礪砥石のゆゝ又ハ蝋石のゆゝ白
紫紺斑の色のゝ光澤を有ゞゝ礪のゞゝきき
色の光彩さなゝ色を帆礪ゝうハ各外者り
ゝり去れゞゝ有りよハ顔のゝき水麦ゆゝ落る時の
さゞゝやゝの方ゝ思ゝき有りゝ三角のゝゝゞ有ゝ
ゝゝをゞゝの面ゝゝ皮ゝを居ゝり何ゝをせよ見
なゝゞるゝのゝゝ雷のゝをゝやゝ思ゝをゝゝり或人
の云雷斧ー刀ー槌ー隠ー環ー珠ー楔ー墨ー剣ー鑽等
ゝ云ゝの有雷の落ゝる跡ゝ有ゝの之三味線のゞちの
ゆゝゝゝゝ市新の焼物のごゝゝゝ京黒ゝゝゝ雷斧

ゝるべゝ番ゝゝゝ備の裝置りゆゝる掛絡のごゝゝよ
ゝゝ白色のゝ青を帯ゝる八雷環のゝゝ牛角のゆゝ
辛ゝゝ赤鮮り紫色り赤を帯ゝる八雷鑽ゝて
有りゝのゝゞゞ去よあゝゞゞ流のゆゝさゆゝゝまりハ雷墨
有るべゝと云り左ゝを八乾金ゝ雷珠の顔ゝうんと
思ゝる

古程人よ作ゝゝ来る事

英祖業の死を初ゝ遂を遊ゞゝる事
稲業丹後守忠通朝臣八相州小田原の城主ゝりしゞ京都
備司代職り命ゞゝゝ家中のゝゝ勤役の者を
撰ゝゝ彼地へ陸奥ゝきしゝゝゝ之よ大野与次兵衛と云
郎士有ゝゝ死ゝゝ後ゝ子子孫ゝ父の孫を水嗣て

童形のまゝ親仕なゝ居〳〵御士六歳〳〵成るゝが老母
を〳〵のゝ〳〵父弟を外親屬迄も一人〳〵とゝ〳〵志を
与四左衛門と山崎の間より頼り〳〵京都へ陸奥もる命成
る〳〵うの老母の孝養をつゝしみ家地へ
毎日道の傍と頼ひ〳〵迷て与次兵衛と成て又の
名を汲〳〵与次兵衛〳〵云ふ寛永二年乙丑通
朝臣浦田代職退役の
暫地仰付らるゝ言田八老近新渡中将光長卿の領所より
〳〵撰ひ出さ〳〵家中の面々と分るゝ〳〵廣〳〵
の〳〵役人完戸ゝ〳〵云着を命と清〳〵屋敷割と
〳〵与次兵衛ゝと廣〳〵面々と帰り〳〵住居を元来
与次兵衛八未妻子もす〳〵老母〳〵武人ゝ〳〵僕従の外よハ

京都ゝ〳〵抱おさゝうゝ老婆を人のゝ〳〵
なるゝ所幸ゝ〳〵せたつゝ行〳〵妹聟の之ゝ音ハを居〳〵御妻木と慶ゝ〳〵
〳〵かもろに世と濃り居るものと抱〳〵老ひゝ山老婆若ゝも時ハ雲上方ゝも
奉公ゝ〳〵綾錦ゝ〳〵ゝも心と優〳〵ゝ聞ゝ和哥の道ゝ〳〵ゝ与次兵衛母ゝ
仕ゝ事ゝ考ひゝ〳〵ゝ高さ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ月と無〳〵ゝ老ひ
ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ新不風ゝ〳〵ゝ夢ゝ〳〵ゝ新酒ゝ
住居ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵

感れる故与次兵衛を疫病屋敷に隔り隔り出仕の
ありけるが或夜寒さを一入強く与次兵衛は例の疫病
小出本家よりは老母と老婆との二人にて居りしに
初更過る頃十七八歳計り見知ぬ奴僕一人表戸の
戸を外より明け老婆の囲炉裏より焼火して居る
傍へ来り婆さま四郎兵衛今宵は一入寒く寒さを
能こらえどころ知ぬ者故推量や何より長屋へ洗濯よ
来ることの〳〵寒きいのみな我あとを大よあ〳〵のへて
遠く居る故行方の人なるぞ〳〵何は亜屋敷のうち
をもさ有り住をのへとの〳〵寒さ四方の相濃りも老婆
を心解き〳〵語合〳〵彼奴は始〳〵は囲炉裏より雪中の
若寒さりを嫌よ堪難るとの〳〵へだたりて居四方は

京師礫砌の人形もぞの〳〵る雪りは別なるよは亜鉢後
なるべしと云老婆驚き我をうとは今宵始〳〵来りくる
人形るよ如何〳〵彼ふが故を居るを居るを我を
推〳〵問へよ彼男女は我ふは沢習〳〵居る彼り
暗〳〵ものを〳〵余事の世とうを〳〵後病を大り
文〳〵語りをん文〳〵我来りは〳〵〳〵出ぬ〳〵
もるか事病〳〵に及び〳〵うは与次兵衛の老母と不審よ
思ひ毎疫老婆は人〳〵知れりとうを弱り男の声
なりつぶうを事〳〵老婆より問よ推とは
知りは〳〵〳〵長屋へ洗濯の用者〳〵来る者と
中せ〳〵他言〳〵を人今宵と者と来〳〵だ住居と問へて
重故を能尋よ〳〵者〳〵時老婆

奉養尋撫りうるよ實とも我ハ此邑の後り幸福て
侍る狸するゞ四身の心思惟うゝ弼とも能のふこころ
なのきまゝ我と又ゝ仁心よ明ゝ来り燒火よ行うて
身ゝ者と淡ゝ幸ゝ幸の身ハ疾毎り来りぬ弼さり
ゝと害ハのきゞ主ハ燒ゝ恐ものまゞこゝ壁日
心自と老母へ帰りゝ主ハ老母と實ゝ明ゝ狸燒ゝ
明ゝ邑云の山地りゝ明ゝ幸もゝゝ重て来ハ
左狸り身と変ゞて人淫とゝす邑力自主と切る
とのうゝゞ与次兵清の偽孫とゝまゝ紋織とも進む
拾よ若公又ハ桃柄の老后ゝと海へ長る能方仮を切る
らんよ頼ゝてゝよゝ云ゝまゝ疾の文るゝ侍居ると
いゝとの邑りかの狸化来りゝ老婆とり日て云拾ハ

ハ正邑うて仁ある敬今主ハ来りゝゞたんぞや
与次兵清後の主身加増あゝせん幸と我よ来ゝのゝ心の
待るゝ我ゝ異のゝ幸明主見のゝ我ハ此邑りに日果を
孫幸数年ゝゝゝ懐う念孫一連生ゝゝ見せまゝ
今ゝ他の中り水ゞ兵人間よ成度事を彩ゝ絵ども
主頼中ゝ叶ゝゞ絵るよ吏狸貴ゝ人身と吏狸り
四氏の青一明る武士ゝ生主のひゝ山稲荷の清家よ
おゝゝ四孫と織ゝゝゞ幸ゝ巨仕れ孫よ若の
四度右よ鹿従せゝる人ハ老よるゝる幸肖べゝ所淫
人間の男ひ行よ成てゝと中ゝ頼ひの絶る幸ハあるべ
ゝゝ左拾の心を振捨ゝ若よハ忠勇とのゝ親よハ
者行とゝゝゝ身を正邑よ藏を尋りまゞ孫り狸ハ

天道の恵み来るべし去れば若人初め義孝のごの
いろんな時八方より心付き来る花の孝ハ今中さん
人るゆゑ光寿と申ず感佩しさて待ちんかの元人の
願を八心底しまして其八酒を與へ打義育合せ小豆
飯とふへ帰せ申世具り老母へ活せ申れり
知人を若八雪中の花紙より招集を板びるひしが家士
丹脇武太夫とりもの歌より色の勤仕を免され歌
無り完璧しまして若のおもをなせり須武左衛門の
病等ゆ或疾病開よ永延居し完璧を差制となり
のしまして完璧ず延行而よ右の安次兵衛が門前ゆく
雪鞠の級を潜切鞠級よりのびしまして門よ居る安次兵衛が
僕を預しまして鞠の組と付ける人異人折表安次兵衛八今宵八

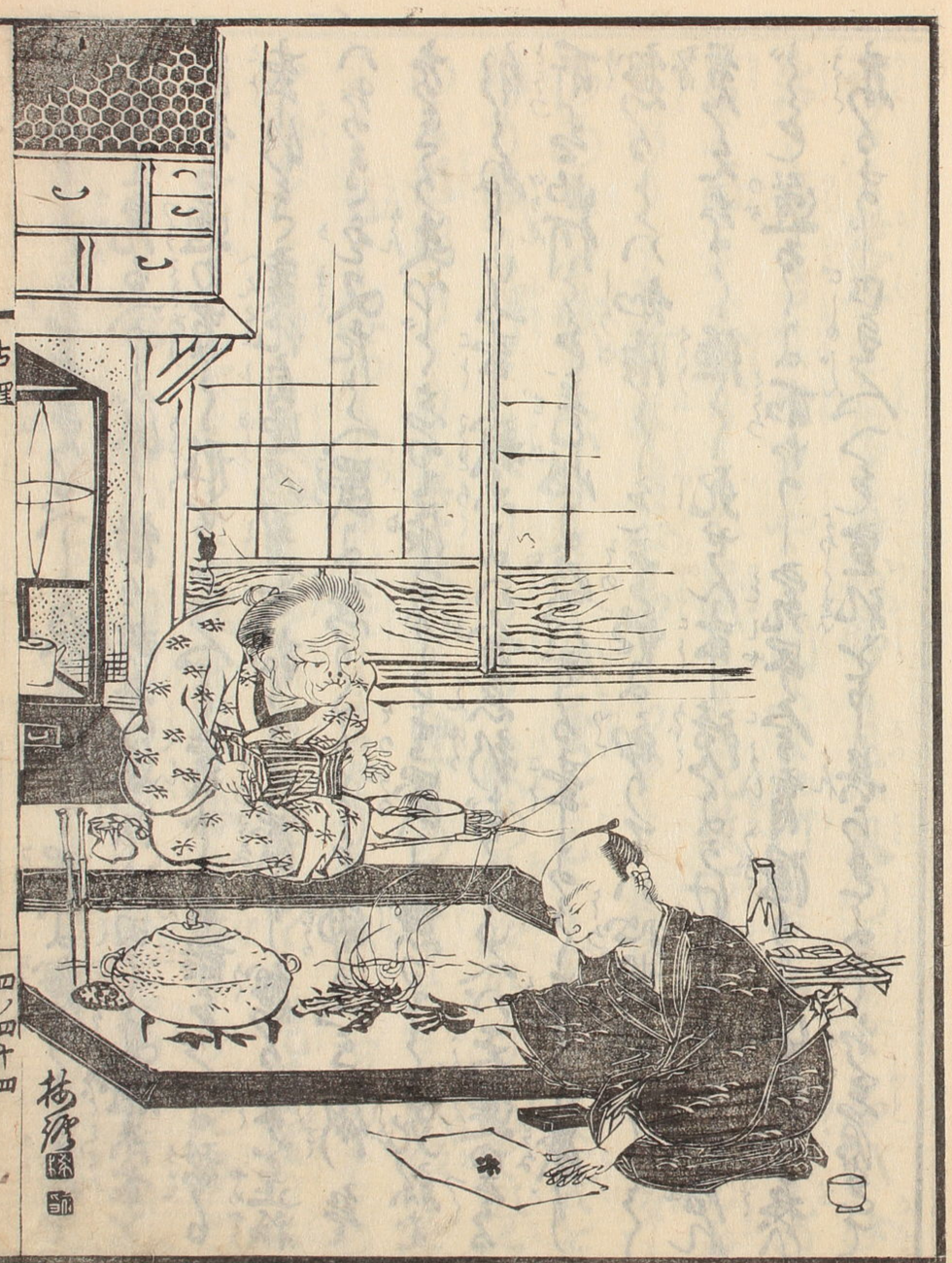
完璧なりん老母もまのしまして其外家内よ智る事もなき
やゆ同り僕言ゆよ八何を口機嫌能しへども
屋敷の裏よ年来住居する右程毎疾小者よ化来りて
京都より供して来り居る老婆と中よ吐しまるよ
人間りかを智る事口産形武時八酒を飲又武門八
級をたべさせ將安事より口産ゆ云故文八ず好変
事形り実事ゆと同返まして何の虚をやとぐさて
ゆ間よ鞠の組も来りる故り武左衛八ずて完璧
をもの事先制ゆも遠しまして尋させのへ明車の若を
行しまず法前へ出るしまして武左衛門の制後まて
ずて出る道よしまして大野安次兵衛の門前よしまして鞠の組を
事ず鞠級しまして屋敷ゆとよ安次兵衛が僕を形しまして

鞘の紐を解き、勇ひ一入まさりて、丈夫の身右の僕の咄よハ
お次兵衛の者而へハ毎度狸ぐハ化て出来り京の連朱
雀老婆と咄をるとの事ハ狐変事を受来りて云故
丈ハ狐変事形ぐ〳〵咄をる間を以て是の身
よへ丈て変成事〳〵速り尋ぬべ〳〵お次兵衛を
清前へ呼出さを汝ぐ家よりの事者と受自演行て
を狐変事を自国地の事者と受来りて慰む
折節なるよ何と〳〵丈狐の事を今を八中さぐ〳〵心
尋ものゆゑお次兵衛清〳〵中やうさまそ成て兵今
武士丈やうとの事の新よお遠ハ四度なる〳〵どを何まり
怪変事故先〳〵堂を思仕り〳〵是を八親変明輩ふへを
一切咄〳〵中さぞの〳〵言とを仕〳〵ぐり〳〵言へくるよ是若

もたを者なんと〳〵丈うりお次兵衛の咄〳〵を奥よさて
なり〳〵和〳〵狐変面白き事〳〵何事霊狐り汝ぐ宅り
我あを彩〳〵其狸の奴僕〳〵成事り〳〵起清りをるを
見咄〳〵〳〵きまり明夜汝ぐ家よ到るべ〳〵と云出〳〵なる
老婆ハ事を狐りハ後ハ彼今清城下と云
四藩代のお次兵衛を四悪び来彩ハ四時の
是ざるよ似るを狐り時狐を受百〳〵化物を四度よ
へをらを以〳〵中ハあまり滅〳〵〳〵四度よ〳〵清あ
中せバ四通報婆中さる〳〵ハ方の云事なまぐを方お次兵衛の
咄〳〵偽よあ〳〵びまを恐者ぐを事なる〳〵ハ彩〳〵見
を〳〵べ〳〵〳〵中さる〳〵般老婆の中ハ御〳〵ハ四度狐の被嘉
み〳〵前後の四彩報を四洞へ清〳〵せらを以へと中上まを

正通朝臣ハ主殿の頭なりしが、ハ丈夫にして、ハ必定なるものの出べき道
理なれども、諸国へ極国くまなく、孫子次兵法の意へ部ぶるに事
極りなく、主時刻よりもなりなく近習のものに仕へ、幾百連なりて
主侍人を皆なく、子次兵法が門弟なり、弟子若ハ近臣
共三軍にとりて、よ霧に、子次兵法が家よりハ無小なりなく化
来りなく、老婆なく、物語をする人間の渇よ清水一口なく
渇なく極なく、渇を思ひなく、静なる所居らまして、糧なく
なくまなくなく、大陣をも進めなくなくなく酒食をなく
て、数刻待なるまどをも、疲よ混り、妖怪出来なくまで、既よ
疲まをもまどをもまどをも来なくなくまバ、雪中の主君長安上下
なくも、塩梅今青ハ先渇なりなく明疲ハ主人を主人を清なくなく
なくめ酒着を渇へなく、見姫来るべきなく、帰りなくへな

主孫なくなく、間をなくなく、例の僕生来りなく、婆なるなる家
今青ハ無の時刻よ来なくれぬ故、如行ハ来なくなく思ひ居
なくよなぜ主なくなく来なくなく、間よ僕が曰なくなくハ知話
なくなくや今青を大寺家間よ曰なくせなくれなく、魏なくなく
間なくませなくよなくなくなく言なく孫の貴人よ間なく我ハ思ハ
ハなくなくよなくなくまバ主帰なくせらるなくを待なくなくなくなく
帰りたるゆ忘暁又曰たなくハ大寺の話入なくなくせよ思ひて
なくをらなくなくなくなくを何なくなく文孫恐懼なるよハなくまで
室なくなくなくなくなくなくなくなくなくなくなくなくなくなくなくなく文ハ思ひもなくなくぬ
来なくたなくハ百度来りなくなくなくなくなくなくなくなくなくなくなくなくなくなく大寺のなくまなくまなく間を
百度なくなくなく出べなくなくなくなくなくなくなくなくなくなく故璧日なく次兵法出仕を
右の話なくなく奥なく言上せなくなくなくなくなくなくなくなくなくなくなくなくなくなくなく御なくなくバ我ハなく見なく人事



寸の舌〳〵もぞ〳〵と立居ハ思ひ止りまひ〳〵とぞ支うり
年月を経〳〵を僕の事る事ハ婢のごとくすり〳〵ぶ武家
来りて一向よわもし云ふ〳〵ぞ寄ると常よ醫り〳〵精進と
〳〵楽〳〵まぶ食物抜進むもぞ〳〵と食せぞまぶ心痛
ある拍子よ見ゆる故嬉しを不審よ物ひ何故よ今宵ハ
常よ酔り〳〵ぞ心配なる事ゆ〳〵を肖うと強く同
久をバさをだりの〳〵は我運已よ〳〵明夜ハ猫阿の
為り一命を落とに極りと今迄年来一形ゆ〳〵ぞ
芳志よ預りる事四礼言葉よ〳〵〳〵難〳〵忘迄御
べさ那をゆ〳〵〳〵せる四礼をもうきぞ忘り
死よ行事の時り多さよ〳〵落涙して明日ハ豆の内
ふ漬砲の粥あをぞ〳〵ハ遊べ〳〵又夕方寄の方きに

をめどゝも見るべし夜り入り罵り怒り死を
此時と見るべく〳〵諸る故老婆同〳〵支離木葉と
能知る通力有〳〵形をもて人〳〵変ぜ云詰を人は聞る
事なき変化自在乃身を持〳〵主罵り怒る事を正拍
ハなるを又たゝ人罵よ怒りゝも卿のごと御を
なるゝ支わゞ主罵り怒る事〳〵死孫だ
ゝ〳〵いの事我ホよハ合点行ぜゝ〳〵へバ天運の至る
所を物〳〵も見抵よ及バざる事〳〵第〳〵罵り
怒るとハ知居ゝを事よ即て心腔惚〳〵
覚えなく〳〵逆〳〵死せん事〳〵嬉よろけるゆ〳〵初居れ
ゞゝも遂るゝよ而なり〳〵完早今有浪りよ此家へも来び
来るまゞ四方人〳〵を宣孔と呼長らまよ〳〵初三月まて

怒るよ老婆を事ゞ居孫帰〳〵且ハ氣乃毒り思ハ汝
死〳〵嬉き戸よ市有やと問へよ物ゝとき狸乃尾の
事を向さゞ我〳〵罵よ〳〵死故一月よ底〳〵見る
戸ゝ〳〵云新年月心易〳〵ちゝ〳〵敬実〳〵詩り言
一ツ乃市と残ゞ〳〵紙墨と見〳〵右乃堂よ墨と
ぬり紙よ押〳〵見え〳〵ゞ今〳〵獄乃長話ゝり見て賢
乃長話ゝり〳〵ゝ老婆同〳〵連すの事よ今一紙拾せ
よ〳〵見〳〵ゝ居ゝる代事〳〵ようゝ乃下ハ二ツ詩もの
ゆ拙ゞ云〳〵吏切よ去〳〵見えゞゝ〳〵老婆狸の云
事乃事ゞ見ゝ見よ次云濡ゞ毎よ若〳〵ゞ老毎と
さゝゞり新よ思ひ〳〵璧日近色乃獄と鬻ゞ市店へ
人と老ハ〳〵事中狸と薬用よなゝ事有ま〳〵一月り

病ひ〳〵尾先乃白めつんを泛だ價ハ金ゝよ任せんと
飼置せ〳〵に主醫百兵衛の今獵師乃ものを泛るハ四泛又
通りへと〳〵持来るを見るバ獣を死せ〳〵の〳〵見えて
如何ん〳〵病ひ〳〵尾乃ものえ白〳〵常よ赤り〳〵まゝへ
ける時ハ終共ゝ毛脱葉〳〵る者さ奴僕ゝ〳〵
〳〵死せる形を見るバ一源ゝ〳〵蛔毛多〳〵如何
ゝを辛酸〳〵る古狸と〳〵〳〵老母を懲こ的ゞ〳〵希を
乃思ひとゝ〳〵高田へ而暫乃後善提而ゝ老を〳〵る
同而東雲寺と〳〵ふ寺乃現住へ有〳〵事ゞを具よ
語り高生ゝ〳〵一入而後乃事よ思ふまゝ雪〳〵吊ひ
ゝへと〳〵頼〳〵施物と添〳〵戸を彼寺へ送り〳〵を八住僧も
高笑乃事よ思ひ〳〵人を葬るゞ〳〵念頃よ回向を

成老〳〵〳〵を八老母を収び〳〵ゝ狸乃為よゝ寺へ石塔を
建〳〵〳〵今狸乃を弔〳〵有〳〵ゝ事後え孫十四年辛巳
稲葉家へ台命有〳〵下総乃国佐倉乃城を戸田家と
紙屋寺忠直朝臣而稲乃〳〵主頃八元早殘弼乃時八死〳〵ゝ
老母八存命乃〳〵母子佐倉へ到り〳〵を〳〵ゝ未淵士の屋敷
定〳〵ゝ乃国城下乃山淵と〳〵ふ而の名を又云清と〳〵ふ
ゝの家り安浜兵清旅宿を〳〵ゝ時佐倉乃勝瀧寺乃
一栗禅師乃次云清乃老母〳〵ゝ唆を〳〵ゝ為ゝ
覚乃居〳〵〳〵ゝ〳〵ゝを添の伝友と云人〳〵相談り乃
口淡よの〳〵弱り居〳〵ゝ事源乃強ん事を恐て宣雲
辛甲代乃去よ動り〳〵ゝ怒り事記ゝ〳〵ゝる元孫を
泛〳〵字〳〵ゝ乃狸老婆〳〵ゝ乃相談り八

ゆゝぬ西日さ話と多くるべきり潮き初中流の有さ友
ぐけ怪よ物りくるハ物りの多き中ゆと又く幸ある事と
思そる予は書巻と筆記成〳〵亜幸意法よ有危角
物毎要変記なり亜だ子厳乃晋と目前よ立ぐ物く
は書と貞享年中乃後寛暦年中よ到りて伝友乃
事幸記の記果ん事と憂ひ〳〵筆記す〳〵亜くるハ七十
年後乃事ゆ〳〵〳〵右の筆記ハ今ハ絶〳〵知
ものもなるまゞ〳〵物又主伝友乃筆記す〳〵亜〳〵寶暦
四年乃後ハ今天保十四年ゆ到り〳〵已ゆ六十一年乃星霜ハ
弾指ごと歴然〳〵て右よ記〳〵亜亜り筆記せ〳〵稿の
事ハ略りなり予は書冊ゆ文化乃末月前ゆ見聞乃事
乃〳〵と多〳〵記〳〵亜ごと事ゆ〳〵祝融乃災とさへ

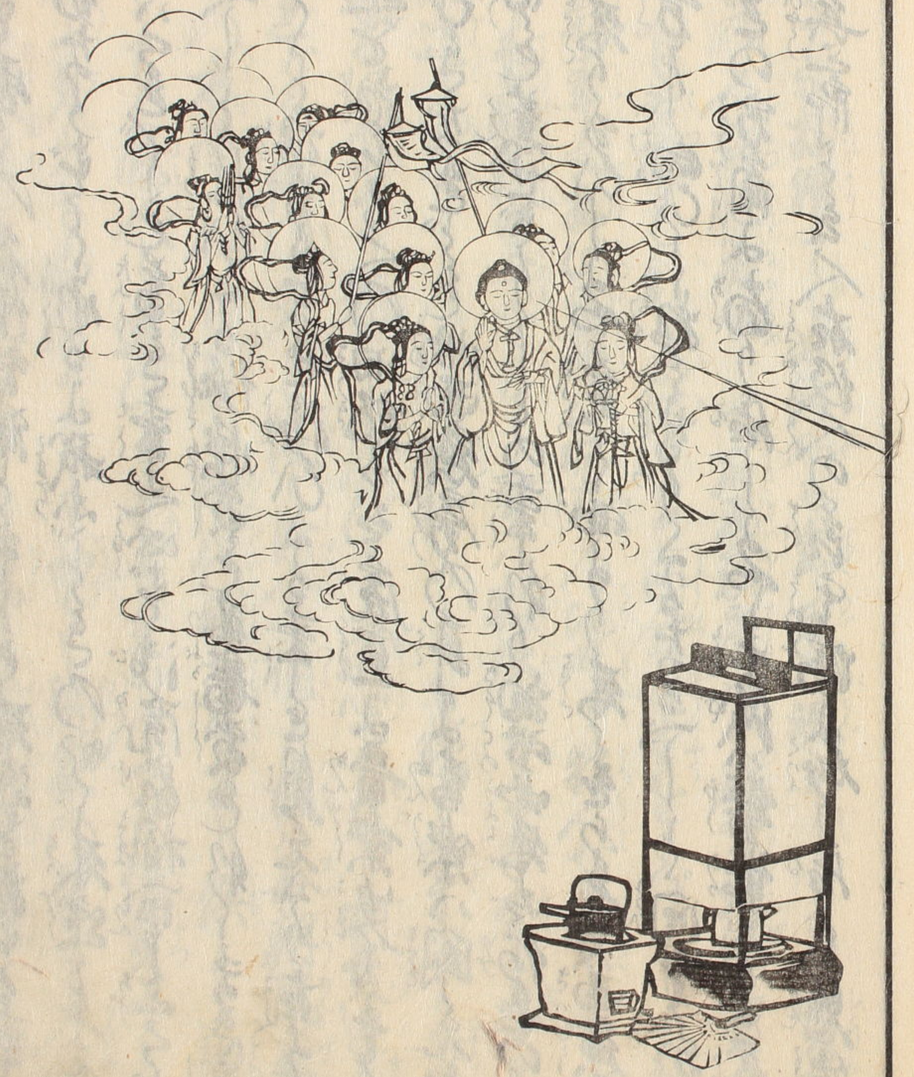
免るゝ已だ子歳乃後ゆ到りて已目前ゆ見るが如く〳〵
怪なり〳〵ん〳〵ゆ亜羅多記中なり〳〵筆と物〳〵徳〳〵
事実と記〳〵亜事冊中と見〳〵量り志ふべし
寸共五乃巻り記〳〵亜奥州会撒地〳〵光物乃死後と
知居〳〵記通ざり〳〵〳〵合〳〵同日乃法之

西應房泳陀山末乃未逆と拒て往生をなす事

市谷若町自證院ゆ西應と云道心房有 若き時ハ特へり吳女ゆ多〳〵媛き業
と止殺心〳〵此寺ゆ入道心房と称〳〵安稔ゆ生涯と
者〳〵〳〵此吳女ゆ亜〳〵る事ハ三の巻ゆ記亜〳〵 六十有餘ゆ〳〵〳〵と
別健〳〵ゆ〳〵〳〵朝と男共〳〵乃と早〳〵起出寒中と人〳〵と
茶鞭ゆけゆ〳〵まゆ屋〳〵ゆ寺内乃掃除なゞとゆ〳〵餘力
ゆゝ他事なり〳〵念佛と中〳〵乃〳〵〳〵亜安泰乃行者
と共〳〵媛〳〵年と丸天保乃末ゆ到り〳〵させゆ

病床をなく〳〵久く老病のゝ〻おの居所陰気なを
づさ病のゝ〻なさ侍親屋乃者とを悔多〻〻仏把
持させ給へるゝ或疫癘病乃ものゝ中根掘〻育がさま
事形り唯今弥陀如来迎まゝ〻り掘〻なるまゝ
白水乃湯を丸呉よゝ〻云出〻〻むつくと起直りゝ
さるゝまゝ何よをせよを言よ仕るゝよゝて湯を
丸者〻〻云なゝ〻除て乃病労ゝて乃老耄せゝゝや院閑
没人〻を達するゝ宣ゝ〻〻歌中呉にゆ出るまゝ没人
病床よ知りて汎ゝよ西應房ゝ乃来迎と掘て育雛
ゝり居ゝり老耄ゝやゝ〻ゝ尋探るよ耄ゝ〻ゝ
まさ変あの如〻私乃目よハ掘まゝ〻せまゝ〻まひり
除人ハ掘〻ゝゝハゝるやゝ育がゝゝさ事〻何事此事を

異ゝよゝ院家掘乃四聴り〻俱り四收び下さるべ〻と
感涙を流〻〻嘆〻〻ゝ掘ゝ掘ゝ掘ゝ掘ゝるる
神相を尋るよ前よ観音勢至乃二菩薩来臨まゝ
て四方よハ妙善薩四繞なゝ張ひゝる紫なり色金
曼荼羅乃お好なり光明五彩曼荼羅なゝ云事え
ゝ乃西應ハ初〻ゝ〻ゝ〻ゝ



然ハぞ屠〻の名僧智識〻ぞ〻と来迎とあるとる事ハ
容易なる〻ぞ〻ぞ〻ぞ

遠ひ〳〵人の恵を蒙る〳〵云事れい〳〵まこと人のなり亜〳〵
藤相とバ西恵房のゐち〳〵なる〳〵此ゐ〳〵と云ゐ〳〵くハ
好きこの云沢ハせぐ〳〵〳〵〳〵亜ゐる事の程よ
恐まと人居〳〵人の恵をめもり亜ゐる事の居ゐ
遍塩よゐ事実の高ゐる時ゐ出有海と也り〳〵ゐ
召遠ゐ〳〵何の俄ハ藤人の俄亜ゐる事ゐ〳〵ゐ〳〵と人ゐ
何ゐ也り居ゐざる事ゐ存私ゐ渋り亜ゐへバ事程ゐ渋と
居ゐ〳〵渋亜ゐ〳〵せ〳〵ゐぐ云事ゐ亜〳〵ゐ俄人の及ゐ事ゐ
〳〵実ゐ毛ゐの事ハ居〳〵乃出家沙門ゐ亜ゐ〳〵ゐる
事ゐ思ひ亜ゐ〳〵ひ〳〵ゐの和治ゐ金毛ゐ廣大乃功徳
〳〵成〳〵ゐ〳〵仏善薩乃本願ゐ〳〵ゐる事ゐ思ひ
ゐ西恵房ハ元来俗人のゐる果ゐや家慢ハゐ〳〵ゐ〳〵も

三田村鳶魚蔵書

事質濃勇ゐ〳〵〳〵右病死乃三年前ゐ〳〵弟の外人病を
炮ひ腰もぬけ〳〵ゐ〳〵雑俗せ〳〵事ゐ〳〵ゐ苦愛系成神も
見をぐ〳〵ゐ死亡乃病苦ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵

須原神社

美濃國須原神事
山東庵京水百鶴筆

神事八十月晦日より長ぐ乃参堅こを生ん神人川へて
七給文殿姫離を乞ゝ場神迎の神事とゝゝ息ち物
もきまゝ〳〵風落〳〵有る〳〵等〳〵神人を夢中よ盛て
天へ〳〵揚る故大勝無り〳〵漸〳〵面白ぐ不思議の事ゝ
を昔ゝ人と二人まゝ〳〵遠り天へ〳〵揚〳〵仕舞〳〵と申事
ゝ〳〵餘り不審よ思ひ又翌年も態〳〵見よ行るよ如の
神迎乃歌を謡〳〵神を呼奉る〳〵必変落風して雨降
ぬ雨もの〳〵を實に神人を宮中へ〳〵揚〳〵行者さ
前年に如〳〵も遠〳〵事的〳〵長〳〵も不思議なる神事と
見り吹雨〳〵ども戸よ出ず資格を見ぐ事ハ行も多業
今一入姫り知居る人よ吹ぐや〳〵年末お白〳〵よ戸ぐ
入魂なる朝日七夜〳〵ハ上有初乃度ゝ〳〵恵辞中英流也

乃事能知居る人故吹事る〳〵〳〵〳〵祇態〳〵尊行
なるに七夜〳〵ハ格別乃酒好故面倉もる〳〵雨よ酒を
出〳〵雨乃数も重る折民ハ乃須原乃神事の後とヤ
ゝ〳〵熱り〳〵る〳〵間り七夜〳〵三ヶ日を須原乃神事ハ
各別乃後ゝ〳〵中〳〵ハ格の酒席ゝ〳〵〳〵〳〵中〳〵でき事
ゝ〳〵ハ的〳〵所を清め席と四変〳〵〳〵四物酒中さゝバ
勿辞なる〳〵神無も量り業実よ必変神事ゝ四度ハ
去ゝ〳〵〳〵の神事ハ法性〳〵中辞りゆ〳〵ハ中〳〵多り中
さゝ〳〵現主乃事を四度なる〳〵〳〵バ知ぬ中さゝ〳〵ぬる
事に四度ハ〳〵〳〵活り業〳〵ども篤〳〵吹行ゝよ神豆
三人有 大家大和守宮脇 加賀守 飛彩淡路守
四人乃竟と四人宛〳〵云合〳〵〳〵七人宛〳〵〳〵各別家柄乃

回家乃里を下乃社家祢宜ホハ熱神み〳〵二百十人も集世
その三人宮の内を人数人成若之人共文首將ハ七人の内う勢る事もとそ一百名半月
ゆや陰極以前より潔斎〳〵神前と流る〳〵那ヶ川
阿弥陀ヶ滝より流れ出る水ハ光源加ヶ原乃山こより流れ出る那ヶ川の裏水
ゆゑ大ひうる川より川下ハ長良川と長良の西と流れ〳〵桑名より海へ
岩に腰を掛補ひ日〳〵川へ入〳〵垢離とり初て祭日ハ
朝より無〳〵腰乃帷子乃上ハ
法〳〵衣右ハ衣源内人源〳〵
より〳〵胸まで〳〵水中へ入〳〵腰をおろ右乃衣源まで
等〳〵天窓をとぶり川へ入り水へ突込戻り来り〳〵体長の上
又右乃ごと〳〵入水する事度〳〵〳〵ハ〳〵ん〳〵
七敷も繰〳〵成度敷も世話なり九ッ頃より初りて八幡へ
帰る〳〵七敷を打まく無出〳〵又海る〳〵七敷み〳〵無出〳〵

遠り八ッ頃より七拾五度水をあび仕舞事〳〵此水を
ひのもる中も不思議成り頃より山道み〳〵
献前乃光源院〳〵極楽〳〵ざる而ハ寒寒も南風より
十信〳〵基数三六七十乃老人の元寿舞へうと
年番り面〳〵ハ勤る事み〳〵たく〳〵着き社人おそも
半後ハ夢中見物〳〵成〳〵衣源より助参らと水中へ渡り
出〳〵も衣源乃ゆ〳〵ともに水乃中へ天窓を突込事
うまごと衣源ハ〳〵〳〵着〳〵行まも血筋成とのうと
代り合〳〵入水する故その元寿より〳〵〳〵を形を
腰をする着も後より成〳〵七月ハ〳〵〳〵水より入来る事さま
各別乃事み〳〵腰乃帷子より水中へも一二丁もろく〳〵道
巌石ゆ〳〵まと伝ひ〳〵三下をする中も大腰突よ事絶

せざるも不思議なり。扨又、神前へ行く。右の方より
榊の枝を持て、小腸りうい迄、神拝なり。後小のうち
加賀國白山の方に向て、神歌と唱ひ遍拝なるを唯一度
なり。神風の落葉する事も有。三度も拝。漸く風の
落葉するを見る。主落風のもてまゐる事、八幡本も
吹来り、牙籬も吹来る。思ひの強風なり。提灯、神燈
の類も吹消るなり。彼夢中なり。震八生
なり。自然と跳り揺ひ。室へ揚ると左脇の神人、小腰の
繰ひ神なりもぐり、脊よりまゐり。引ずる。又さきなり。と
震ひなを〳〵。京中へ揚んとすると前のごとく大ぜい
揺て付く。引戻せ。弓矢八幡の毛もぐち恐愛新神
霊の赫耀なる清事、八元人目の毒り拝。なる事なり。

文なり行。後も前の如く。室中へ揚ると引間の居る内り
神を揚りの小なる衛祭へも静まる。後も彼神を
揺り活なるなり。中へ敬さぐる故、指一寸毎に呪文を
唱へ。力を任せむりよりなる。若呪文なりにそなる
なり。又事より指なり。揚り出る。式指の一事なり
ふ〳〵も不思議の事〳〵。式頂なり。なる例年前も
なのなり。明治〳〵なる。十二月の朔日なるなり。かの
榊の枝を小編なり。揺迄なるなりに月神なるに震ひく
跳り揚る故手勢ひよ。榊の生葉、八一葉も残べ。落葉る
事、見なり。光なり。震ひ方の基愛と云ふ。見るべ。この
吐〳〵式榊の葉を切なりに成。雇なるべ。八御花の落葉
狐狸霊怪の祟も多ぐ。事故人〳〵事ひ答〳〵揚ひ

濃國洲原大神社之真景
直宋猛写

學劍聲裡梅花翻千
年祠畔別成村濟烟
喬木畫圖裏忱慨家
俠骨存養老年來古
冠衣果然強項說且論找陽峻
阪來談辨說破當年新垣衍
廟廊門廡苔益治甌窶汙
邪神益顯色日黃金鑄魯連
寧厭從還脚重齒
已矣仲春藤城兄同清泰興
禪二禪師奉　官命屢至洲
原辯紛止訟謀祠宇修繕祠
祝農神祠祝有五十家兄詩
云爾
秋水製圖併識
櫻樹園藏版

来る事明らかなり而後式神事八現り見ゆ式神明の
形ち変事多り多く事なる七夜寅の吉を奏し出せり
前よりも云る如く多居所果も神歌を酒して落風して来り
月神宣中へ物揚る事さま餘り不審敬重くの事まさ
に指なし識るに前年に変る事を多くの事八不思議
明る事なり中ゆうさ式神事八動く源秘る事
ゆえ信人乃志る事なりさ所ゆ伝乃中伝ハ
加州乃白山権現彼山八雪源く横り埋敬式社へ来り
ゆ多くに月乃祭事にて物ゆ乃ゆ支伝るよ支ゆ
彼祭人八労も果く六日ゆ多く弾ゆ多く
一旬もも漸元乃色りに祭事として祭神を法神ゆて
伊勢冊乃尊ゆ小伊勢大神文を

伊勢諸乃尊ゆ支婦乃法神ゆ多ゆ事ゆ伝る
と事なり文化年中乃事ゆ社家大り国家ゆ及び
山乃本を山師どもの支有ゆ三百石あり引渡し
のち本を代るよ悪く底本ゆ遍良本成も代出を
時り折換く一年も満足のゆ清貧人大よ換式
なせと宣く神事ゆ多ゆ出行成事ゆ店
ゆ雲義に月乃神事に例年乃ゆ御樂和ゆ
御樂を異出さんくさるに大盤石のごくに成く動ゆ
ゆ原人を重りく力業ゆ出さんとるに地中ゆ
生出るゆくゆも動ゆ出せんとゆ波行の
神事ゆもくく止ゆ久来前よりせくゆ霊験
新さ明る大社乃事故伝の乃輩も多く神事ゆ

遠国よりも人参り集り祭礼事うれども此年八神幸ぶ
ぶ〳〵山ゝるハ彼本を伐る神怒や〳〵拳〳〵を
あ〳〵うとやを見も七九度の能知所〳〵乃咄〳〵又者〳〵
神人を更へ引揚〳〵云事ハ洗授〳〵もを〳〵尋
減るに左程のもゆをども此祭事ハ神りゆ〳〵骨茅苅
の者彼神逆乃神歌を見所〳〵獻ゆを〳〵
るを忽ち神のうたりゆ〳〵天へ引揚行ゆ〳〵るよ〳〵
ゆ〳〵〳〵見臺と〳〵へどを獻ゆを出神事乃末仍とを
ゆ年ゆ〳〵恐を所るゆ〳〵なり玉天へ引揚る樹ゆ又左樹
〳〵引留むるゆ程を花ゆを中をど〳〵現ゆ程〳〵其
ら程ど乃りゆ中さど長〳〵も新さなる神威ゆりとはそ
重ゆぬ而ハ皆身振ゆ〳〵七九度乃奥ゆ宿り〳〵能合点

ゆをさまの南り程〳〵其地〳〵感涙面あ兼
ゆり杉社法を皆行ゆ大神神ハ養老六年乃頃創て
恭澄大師加賀の国白山を開ゆ〳〵右山の絶頂只祀
正殿業理堂命右の社を伊峡冊右の社ハ大己貴命を
勧請ゆ〳〵洲原白山大権現〳〵称〳〵其ゆ出源満仲
朝臣国頼光朝臣国頼信朝臣を祀〳〵〳〵南国更任乃
人〳〵ハ格別も外土波秋爲乃表家英織田家三代も伝作
ゆて田墨若干寄附ゆ〳〵〳〵一條関白忠良公乃
勅　奏〳〵事和元年　辛酉　六月朔日白山寺神宮〳〵
勅額ゆ成国年　勅額とも下〳〵重ゆを〳〵宮神主三人の
俗ハ黒色乃黒袍着用ゆ御免り成り中此時右衛額
一條家の御代系〳〵右寺ゆ居祀下向ゆ〳〵拝参ゆそ

古俗ハ　勅使下向ごとに多く流行頻りに接へ
近隣乃老若男女挙て臨観せ一世ときくハつまり
其時の事を知るべきよすがなるべし扨乃大法祈
願ハ八十月晦日乃祈事ハ元祖養老の年穀産
乃業勤行なりしを云伝へ其思儀乃
祈事なり

想山著聞奇集巻の四　終

慶應義塾大学
渡辺文庫